

あの約束を果たす為に
——巡り回る運命 完結

レイハントン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの時の約束から2年の月日が流れた。親の都合で日本を離れていた神山恵はアメリカの高校を卒業し、日本に母親と共に帰ってくる。

そこで目の当たりにした現実。

2年程度じゃ変わらないだろうという恵の考えは甘かったのだ。彼に居場所など当になかった。それでも自分の居場所を見つけて1人生きていく物語。

彼、彼女の行動で未来は変わる——明るい未来か……残酷な未来か……。恵は有咲と結ばれ——

目次

| | |
|--------------------|-----|
| 帰ってきたはいいが、居場所がなかった | 1 |
| 失った灯火 | 16 |
| 新たな灯火 | 28 |
| 初めてのバイト | 40 |
| 好きになる瞬間 | 54 |
| 久しぶりの再会 | 68 |
| 変わる想い | 80 |
| Last Episode 果たされた | |
| 約束 | 93 |
| FAINLEPIISODE 思い出話 | 107 |

帰ってきたはいいが、居場所がなかった

心地よい春の風が吹く4月某日。墓参りの日でもないのに、俺は黒いスーツの上に黒いコートを着て神山哲夫之墓の前に居る。右手には色とりどりの花。備えるのに持ってきた。

「……………もう少しだけ待っててくれ。後1人なんだ。そいつを殺れば俺もそっちに行くから…………」

花を添えて手を合わせる。

「それまで待っててくれ」

現実残酷だ。手を伸ばしても掴めないものがある。どれだけ努力しようが、あらがおうがお構いなしに残酷な現実を突きつけてくる。でも……………現実は残酷でも未来は変えられる。どこがで俺の未来が変わってくれる事を今の俺は祈るしかない。

「笑いたければ笑えよ。復讐に駆られたアホな俺を…………」

誰も居ないお墓が並ぶ場所で1人、その場に立ち尽くす。

俺の未来はどこで狂ったんだろうな。

4月某日。約2年振りに帰ってきた、俺——神山恵。とお母さん。本当は一人で帰ってくる予定だったんだけど、心配だからって一緒に帰ってきてくれたんだ。

にしてもあの親父、最後の最後まで反発してきやがつてよ。でもまあ……いつもの心配だからなんだろうけどさ。あの夏の出来事以来、親父との仲は普通に戻った。白鷺さんには感謝してもしきれない。

お母さん変わらず優しくしてくれる。正直気持ち悪いと思うくらい。アメリカで通ってた高校から帰ってくると、『いじめられなかった?』とか『友達出来た?』とかしつこい程に聞かれ過ぎて、聞いているようで聞いてないという技を習得した。まあバレルようになったんだけどな……母親恐ろしやう。

今は新しい部屋に引っ越してきて数日が経った。部屋はアパートなんだけど、結構高

そんな所で場所はく羽丘女学園が近い場所かな。家賃は俺とお母さんの2人で払うことになってる。今年の4月から、また芸能活動再開するらしい。

「こんなもんでいいだろ」

たった今荷物の整理とダンボールの片付けを全て終わらせ、自分の部屋に置いてあるベッドに寝転がって少し休憩。早速スマホをいじり始め、画面に映るaimondの友達一覧を見ているところ最近連絡した記録がない。

「なんかこっちから連絡するのもあれだしな……」

帰ってきたとかみんなに言っても、だから？　みたいな反応されたら悲しいし、ただの寂しい人じゃん。そんなんだったら街で会った時に声をかけてもらった方がいいし。でもな〜〜暇なんだよな〜。

「思い切りも大事か」

aimondの連絡先からハードルの低い徹に連絡をしようと画面をタッチする。しかし反応しなかった。もう一度押そうと親指を画面に近づけると、画面が急に電話の画面に切り替わる。相手は意外にもおたえだった。

「マ、マジか……」

一度起き上がり、すぐに電話に出ようとしたがすぐに切れてしまった。するとaimondにおたえから、『ごめん。間違えた』と連絡が入ってきたのを確認して、ベッドに

スマホを投げつけてツツコミを入れた。

「紛らわしいんじゃない!!」

落ち着きを取り戻してスマホを手に取り、aimondを起動して、『大丈夫だ』と返事を返した。そのままスマホの画面を閉じ、両手を頭の下にしてベッドに寝転がる。白い天井と電気だけが視界に入ってくる中、スマホが震えた。画面にはおたえから、ウサギとOKが描かれたスタンプが映る。しばらく眺めていると自然と画面は真つ暗になり通知を知らせるランプが一定のリズムで黄色に光るだけ。

本格的にどうしようかな……。なんか声かけづらくなっちゃったよ。俺が帰ってきたのなんか知ってもどうでも良さそうだな。

正直Poppin, Party略してポピパ面子とは、丸2年話していない。つうか今さつき連絡ついたんだから気付けよな。海外と日本では連絡をとる手段は手紙くらいだが、あいにく俺はあいつらの住所まで把握しているストーカーではない。そもそもストーカーではない。

話は変わるけど、有咲の事は今でも好きな気持ちは変わったことなんて一度もない。そのために帰ってきたようなもんだからな。

「ホント……どうしよう」

考えても答えが出てくるわけじゃない。ここはアクティブに行こう。じーつとして

てもどうにもなんねえ！　だ。このネタはわかる人にはわかると思う。そのセリフを言ったからと言って、融合はしない。……………準備して有咲に会いに行くか。

スマホと財布を持って自室を出てお母さんに一声かけるためにリビングに向かい、ドアを開けた。リビングではお母さんがバラエティー番組を見て笑っている。あんまり邪魔するのもあれだと思ったが、声をかけた。

「お母さん。少し出てくる」

「夕飯までには帰ってくるのよー」

こつちを見ずに答えるとなにやらメモをし始めた。芸能活動再開に当たってなにか調べごととしてるんだらうな。努力は欠かさない。さすが俺のお母さんだ。ってことは俺の努力する部分はここから来てるのか？　なんか少し嬉しいな。

リビングを出てドアを閉めようとした瞬間。「ちよつと待って！」と大きめの声で呼び止められた。お母さんの元に歩いていくとメモ用紙を一枚俺に渡してきたのを受け取り、タイトルに目を通す。

「前言撤回」

「なにが？」

「なんでもない。行ってきました」

……芸能活動の為のメモではなく、ただ単に今日の夕食と書かれたの買い物メ

モだった。今すぐビリビリに破り捨ててやろうか。いや待て、落ち着け俺。ここで破いてしまったらどうなる。夕食がカップ麺とかインスタント食品になつてしまう。それだけは避けるんだ！　ここ最近引越しの疲れで全くご飯作ってくれないから、買い物メモを破り捨てるわけには！　今度は買ってこくる物の一覧に目を通す………がしかし。ほとんど手軽に作れるインスタント食品だったからさすがにくしゃくしゃにしてポケツトに突っ込んだのは言うまでもない。

外に出た俺は若干機嫌が優れなかった。今日こそ普通のご飯が食べられると思つていたのに、またインスタント。これで5日連続だよ………全く………これだからお母さんは。………そうか！　自分で料理出来るようになればこんな思いしないで済むじゃん！　なーんだ簡単だなおい。

この時はそう思っていた。しかし料理は甘くないと知るのはもう少し先のお話。

数10分かかってやっと着いたのは商店街。この商店街に来るのも2年ぶりだ。この忘れもしないパンの匂いと、コロツケの匂い。思い出に浸りながら、商店街を眺めて歩く。そんな時、ふと目に入ったのは羽沢珈琲店。一度元カノ姫川優衣ひめかわゆういと入った喫茶店

だ。2年そこらじゃ変わらずって感じだな。

横を通り過ぎようとした俺の視界の端に見逃せないものが見えた。思わずそれを2度見してしまう程。喫茶店の窓ガラスの向こうには謎の男とお茶をする有咲の姿があつたからだ。

「え？　え？　あれは誰？　ここで何してるの？　俺は誰？」

もう混乱するしかない。だつてしらん男とお茶してるんだぞ?!　しかもその男が後ろ姿だけでこつちから見えない!　黒髪でジャニーズに居そうな髪型の男。あれで女と言われた暁には、喜んで商店街をギター弾きながら歩き回つてやろうじゃないか!!

じーつと見ていると、男の向かい側に座っている有咲と視線があつてしまった。俺は見えない見てないと言わんばかりの表情を浮かべてその場から全力疾走した逃げ出した。きつと今頃、『あれ？　恵?』とか思つてる頃だろうけど、俺は日本になんか帰つてきてませーん!!　ちくしょー!!　聞いてねえぞ!　だつてここ数ヶ月連絡とつてないんだもん!　わかるわけないじゃんかー!!

しばらく走りいつの間にか商店街を出てしまった。そのまま商店街に戻る気にはなれず、ちょうどあつた公園に入つて木の陰にあるベンチに座つて顔の前で、どこぞの逃げちゃダメだを連呼する子のお父さんのように手を組む。

今の状況を整理しよう。俺は2年前に日本を出てアメリカに引越して、2年経つて

から日本に帰ってきた。日本を発つ前にあの男は居たか？ 答えはNOだ。じゃあ2年の間に現れたってことになる……

「詰んだんじゃない？」

ふと顔を上げて、青い空を見つめた。ここはアメリカと違って見上げても大きな建物が目に入ってこない。昼間なのに人がたくさん歩いているわけでもない。ものすごく

「……………静かな場所だな」

時折吹く風が周りの木々や俺の髪を揺らす。実際、2年も離れていればみんなに彼氏の1人や2人出来てもおかしくはない。なんて言ってる俺もこの2年で彼女の1人や2人……………つくれてない。むしろ作らなかつたって言った方が正しい。必ず帰るって約束したのに彼女つくつたらおかしいだろ？ ってことで俺の気持ちは変わらないわけだ。

そうは思ってもどうしようもないわけでした。ただ公園を眺めるしか出来なかつた。もし聞きに行つて本当に彼氏だったら、俺はその場で燃えて灰になって土の肥料になつてやろう。いや……………海に沈むのもいいな……………。ビルの上から I c a n f l y するのもいいかも。

なんてアホ極まりないことを考えていると、最近は何も聞かなくなつた音が聞こえてき

た。それでもわからないわけではない。風に乗って聞こえてくるのはギターの音。大きき、音からするとアコギではなく、エレキだ。

周りを見渡すがそれらしき人は見つからない。ベンチから立ち上がって、少し移動すると小学生くらいの少女がベンチに座って青いギターを弾いていた。聞こえてくるのはギターの音だけじゃなく、声も聞こえてくる。

「誰も居ないと思ったのかな？」

なんで気付かなかったんだ？ と考えると、理由はすぐにわかった。俺が座っているのは、大きな木の陰の下のベンチ。ギターを弾いている子がいるのはここから、少し立って移動しなければ見えない場所だから。それよりも気になったのは――

「この歌は………」

少女が歌っている曲は俺もよく聞いている『前ハススメ』でポピパの曲だ。この曲にどれだけ助けられたか、今では数え切れないほど。なぜアメリカに居るのに聞けた理由は簡単。あいつらは You^{ユウ} tubes^{チューブズ}に動画を上げるといふ画期的な方法を思いついた。だから聴けたんだよ。

俺はいつの間にか歌に誘われた様に少女のもとに歩いていった。目を瞑って演奏しているからか、俺に気付く様子はない。

聴き入っていると、やつと俺に気付いたのか演奏が止まって顔を赤くしてこちらを見

てきた。とりあえず不審者じゃないのを証明しなければ。

「最初に言っておくけど不審者じゃないからね?」

一歩近づいて言うと、女の子は一瞬ビクツと体を引く。正直やってしまった……アメリカではもつとフレンドリーな感じだったからついクセ的なものが出た。これじゃあ余計に怪しむよな。

「不審者の人はみんな不審者じゃないよって言うから気をつけてって教わったよ?」

「それはそうなんだけど……」

こじやあますます怪しくなるじゃないか。なにかこの状況を乗り切れる手段は……なんでも俺は不審者じゃないことを証明しようとしてるんだ? いきなりそんなこと言ったら怪しまれるに決まってるじゃんか。

「さっきの歌、『前へススメ』だよな? ポピパの」

「不審者さん知ってるの?!」

「うんとりあえずその不審者さんはやめようか。本当にそうなっちゃうから」

なんとか不審者じゃないことを証明出来そうだ。それにしても率直な呼び方だなく。前にも似たような経験したような気が……。あれか俺じゃない、香澄だ香澄。おたえに変態だつて言われたんだっけ。そんな話は置いてだ。

他に話せることがないかと考えた結果、次に話したのは一番記憶に残ってる曲――

—『STAR BEAT—星の鼓動』の話。

「他にも『STAR BEAT』知ってるぞ。文化祭で初めてポピパの5人で演奏した曲」

「いや、そこまで知ってる気持ち悪い」

「えー……」

なんだこの子。ドストレートに言ってくるし、さっきまで怯えてたくせに今はゴミを見るような目で俺の顔を見てくるんですけど……。最近の子は冷たいのね。

改めて日本の厳しさを知った俺であった。

「……………あの」

次はどうしようかと考えていると、意外にも女の子の方から声をかけてきた。「なにかな?」と返事をする、一旦俯いてしまった。その様子を見ているとなんだか不安気持ちになってくる。そつとズボンのチャックに手を伸ばした。

よし……大丈夫。チャックは閉まっている。

「2年前くらいに花園たえさんと一緒に居たけいちゃんさんですか!」

「うん待とうか。けいちゃん情報誰から手に入れのかな?」

恐らくというか香澄、おたえ、沙綾しか俺のことをちゃん付けて呼んでいないからこの中の誰かだ……。おたえだな。なんとなくだけど。それより、今は目の前のことに

集中集中。

犯人を考えるのを一旦やめて、詳しく聞くことにした。

「ワタシ、2年前にギター初めて、ギター教室にも通よつてます。将来バンドもやりたいな〜つて思つて体力つけるために走り始めたんです！」

「それで？」

「こことは違う公園で師匠に出会つたんです!!」

「お、おう」

興奮気味に話す女の子からは熱い熱い思いが伝わってくる。熱すぎて思わず一歩引いてしまった。もうどつちが不審者だかわからねえよ。

その後もこの2年間の話を熱く語られたわけだけど……ずっと立つて聞くことは出来なかつたから、途中許可をとつて隣に座らせてもらった。おたえといや……ポピパとの思い出を話す彼女はどこか。いや、かなり楽しそうで夢中で話してくれた。お陰でこの2年であったことがだいたい理解することができたわけなだけど……さすがと
いうか、無茶したなというか。

それでも一番驚いたのはライブハウス、spaceがなくなってしまったこと。香澄達は最後にライブをしたみたいで、夢を叶えたのはよくわかった。

「なんかいろいろあつたんだな」

「はい！ でも師匠達は笑ってましたよ？」

「マジで？ 強いんだか、アホなんだかよくわかんねえけどな」

この後、彼女は用事があるのでと言って帰っていった。結局名前を聞くのを忘れてしまったけど、またいつか会えるだろうと思いつつまで焦りはしなかった。

やることないし、そろそろ帰るか……………。

1人、「よっこらせ」と言いながら立ち上がる。ジジイかとツツコミたくなる気持ちはわかる。このままだとノリツツコミしちやいそうなもの。……………1人って寂しいんだね。

悲しい気持ちで入ってきた場所から公園を出てすぐ、右に曲がった。ここら辺も昔と比べてもまるで変わらない。この街は変わらず俺の事を待っていてくれた。みんなはどこか遠い場所に行ってしまったような気がする。

「恵!!」

とうとう幻聴まで聞こえるように……。俺は幻聴を無視して歩き続ける。

「おい！ 無視すんなよ！」

あー有咲の声が聞こえてくる。・・・有咲…の声？

その場で立ち止まり、ゆっくりと後ろに振り返る。

「有…咲？」

そこには俺がずっと会いたかった人が、息を切らして立っていた。

「……………恵」

有咲が一步踏み出したその瞬間——左手を誰かの手が掴んだ。

「ちよつと待てくれよアリサさん」

俺の視線の先には喫茶店で見た男の姿があつた。あの髪型、間違いない。いったい誰なんだ？

「お前が神山恵か」

「は？　なんで俺の名前を？」

「聞いたんだよ…アリサさんから。よく2年も待たせられたよな」

そう言う男は有咲の隣に立って肩に手を回して衝撃の発言をしたのであつた。

「まつ、今のアリサさんはおれの彼女だけだな」

男がそう言うのと俺から視線を逸らす有咲。どうやら嘘ではないらしい。

失った灯火

「好きな人を取られるってこんな気持ちなんだな」

時間帯は夕方。自宅のベッドで天上を見上げてふとそんな事を言ってみた。どうやら2年間で俺の居場所というものは本当になくなってしまったらしい。その証拠に有咲は他の男と付き合っている。普通ならあそこでどうにかなりそうなものだが、なんでもかかわからない。でも、怒りすら湧いてこなかったのだ。

それよりも引つかかっているのは、有咲のあの表情。あの男が“彼女”と言った瞬間、俺から視線を逸らしたのを見逃さなかった。あの表情はなんだ？ 愉快過ぎて目も当てられないとか、バカにしてる感じじゃないんだよ。

なんかこう……申し訳ない感じ。だとしたら有咲は間違えている。俺の最後に言った言葉を忘れたのか？ 花女の学年トップがどうしたものかね。

別に有咲が男と付き合うのは勝手だ。俺が決める事でもない。むしろ言う人が見つかって、安心していい。こんな俺が幸せに出来るとは思えないし。約束したのに薄情だよな……。

「明日もう一回行ってみつか」

と言つても明日はバイトの面接あるんだよな。その後にも……行く……か。
アメリカに2年住んで、日本に帰つてくると時差でこの時間は眠くなるんだよな。

ふと目を覚ますと部屋は真つ暗で何にも見えない状況。手探りでスマホを探して、時間を確認すると夜の9時だった。通知欄には数件来ている。通知が来た時間は夕方。たぶん俺が寝たあとに来たんだろう。aimondを開くと香澄、おたえ、りみ、沙綾、徹から。有咲からは来ていない。……それもそうか。

寝起きということもあり、返事を返すのに結構時間がかかってしまった。一番困ったのは、おたえへの返事。何が困ったかって、普通はお帰りから始まると思うけど、おたえは違う。

『よく生きてたね』

「お前はどこに行つたと思つてるの？」

そんな危険地帯に行つたわけじゃないんだぞ？ ……でもまあおたえらしいよ。帰つてきたつて感じ。そんなおたえには、『生きてるわ笑』とだけ返した。沙綾も沙綾で人を軽くからかうのは変わんないんだな。

『お帰りー。あたしに会えなくて寂しかった？笑笑』

ここで焦りを表現すると、さらなめんどくさい事になりそうだからこっちから仕掛けてまた。

『寂しかった……』

なんか新しい問題が出てきそうだけど……大丈夫だろ。この自信はどこから湧いてくるのやら。一番普通の反応だったのはやっぱり、りみだ。

『お帰り。外国どうだった？』

な？ 普通だろ？ もはや天使の域だよ。ポピパの中で唯一俺に対して普通に接してくる人だ。香澄とかおたえは普通なんだろうけど、俺からすれば普通ではない。いつも予想の斜め上を行きやがって。

『お帰り！お土産とかある？』

「あると思ってるの？」

その答えはYesだ。つまり買ってないって事だな。言い訳をさせてもらうと、普通に忘れていたわけだ。なぜ？ って聞かれるとあれなんだが、一番の理由は旅行ではなかったからかな。旅行気分ならあ、お土産買っていいこうってなるけど、2年も住んでればお土産買っていいこうなんて思わなくなる。はずだ！

「アホらし。腹減ったからなんか食うか」

自分の部屋を出てリビングに向かう。ドアを開けると、美味しそうな匂いが漂ってきていた。テーブルの上には、いつ食べたか覚えていない、久しぶり過ぎる野菜炒めが盛りられている皿。

目を丸くして見てみると、お母さんが、「どうかしたの?」と若干笑いながら言った。だつて……ね? 昨日までインスタントだったのが、これだもの。驚くのも無理ないよ。

「いや、珍しいな」と思つて」

「失礼しちゃうわね。私だつて母親よ?」

「昨日まで朝、昼、晚インスタント食品でまかなおうとしたのはどこの誰?」

「うっ……」

全く……。楽したい気持ちはわかるけど、さすがに帰つて来てから数日全部インスタントはどうかしてると思う。まあ、そうならない為にも料理を学んでおいて損はないな。

そう思つて椅子に座ると炊きたてのご飯が運ばれてきた。お母さんが椅子に座るのを待つ間、じーつと白い湯気が上がる野菜炒めを眺めていた。

ふと思ひ出すのはやっぱり有咲とあの男の事。関係性をもつと詳しく知りたい気持ちは強い。キスしたのか? とかではないから悪しからず。いつ頃から付き合つてい

るのかだ。俺が居なくなつたタイミングなら、計画的の可能性が高い。そうになると、なかなか頭が良いような気がする。

たまたま出会つて一目惚れしたのなら計画性は薄い。やつぱ2年は長かつたかな。飛び級して帰つてくるって方法もあつたけど、クソ親父に止められた。ホントクソだな。

「恵？ 聞いてる？」

お母さんに話しかけられふと我に帰り、視線を野菜炒めからお母さんに移して言った。

「なにを？」

「あんた、考え事してると一点を見つめるから気をつけないさいって話よ」

「あ、うん」

アメリカに引越してから着いた癖なんだけど、考え事をしてる時はなんか一点を見つめちゃうんだよ。でも、1人で考え事をするときにはちようど良い。……今は有咲の事よりも、減つた腹を膨らませる為に飯を食べるとするか。

「いただきます」

「どうぞ〜」

それにしてもなぜ今の時間に起きて来るのがわかつたんだ？ ……お母さんとい

う生き物は時々怖い。

次の日。今日はバイトの面接で、今まさにバイト先に来ているわけだが、相変わらず女子が多い。さすがガールズバンドの聖地があつた場所だ。俺が来ている所はライブハウスCircle。やっぱ音楽が好きだからこういう所でバイトしたくなるんだよ。実はアメリカ

のライブハウスでバイトしてたり。

で、着ちやっただけでわけなだけでー。相変わらずの女子率の高さ！ 1人男子が居ると気まずい。だがしかし。そこを除けば最高の場所だ。スタジオあつて、ライブも出来るという。SPACEよりも広い。なにより怖そうな人が居なさそうだし。オーナーは今頃なにしてるんだ？

今は面接をしてくれる人が来るのを待つてるわけだけども……まだかな。来てから10分くらい経つんだけど。

周り見てるといやらしい視線送つてるとか思われそうだから、スマホで時間潰すか。

それから数分経ただろうか。スマホをいじっていると声をかけられた。視線を上げるとそこには、黒い髪を肩より下くらいに伸ばした女性の人。

「君がバイトの面接に来た子かな？」

「はい。神山恵です。よろしくお願いします」

「よろしく。じゃあ、着いてきて。部屋に案内するから」

「はい」

荷物を持って面接官の人の後ろに着いて歩き、スタッフと書いてあるドアをくぐった。

この人が面接してくれる人か。見るからに優しそうな人だなく。SPACEのオーナーとは大違いだ。もし受かったらやっていけそう。

部屋に着くと、テーブルを挟んで椅子が1つずつ置いてある。面接の時はすぐに座つちやダメなんだよな。

椅子の横に立って待っていると、面接官の人が座り一段落着いた。

「あつ、どうぞで」

「失礼します」

持っていた荷物を下ろして、ポケットからメモ帳とペンを。鞆から履歴書が入っているクリアファイルを出してから座った。

「改めて、ここで働いてる月島まりなです。よろしくね」

「につこりと笑顔で挨拶をする面接官の月島まりなさん。第一印象は優しそうな人。これの一点だ。」

「よろしくお願いします」

ペコりと頭を下げた挨拶をした。

「アメリカの高校出てるんだ。しかも結構有名な所ね」

「あ、はい。高一の時に親の都合で転校しまして」

「そつかく。外国に引越して大変だよね？」

「はい……」

「って言っても俺はなんも手伝ってないから大変さは知らん。だって勝手に決められて行ったんだもん。でも今はそれでも良かったかなって思ってる。」

「面接官の人が、「そつかく」と笑顔で言う俺への質問は終わったのか本題に入った。」

「まずは、履歴書持って来てる？」

「はい。これです」

「クリアファイルから履歴書を出して面接官の人に渡した。すると、履歴書を見るなり

「へえ〜」と感心された。そこまで感心されるような事を書いただろうか。答えはNOの……はず。いったいどこに反応したんだ？

「君、もしかしてだけどPoppin' partyの人と知り合いだったたりしない？」

「はい……まあ」

なぜここでPoppin' partyという単語が出てくる？これは嫌

々な予感。まだ冬がくれたよかんの方がマシだぞ。

「香澄ちゃんの言ってた、人って君だったんだね」

「香澄がですか？」

「うん。話はよく聞いてるよ。すごい人だって」

なんだそれ……香澄が俺の事をすごい人って思ってたなんて知らないんだけど？

一緒に居る時なんてほとんどそんなこと言わなかったじゃん。……つたく、仕方ねえ奴だな。

「いろいろテクニクがすごいって」

「それ聞く人によつては別の方向にねじ曲がりませんか？」

言い方考えて。楽器の演奏のテクニクって言わないと……。なにこれ自分で言うことじゃなくね？

「つて事で、明日から来れたりする？」

「え？ ご、合格なんですか？」

「うん。男手足らなくてね…。神山君が来てくれて助かった」

「そういう事なら。明日からよろしくお願いします」

頭を下げて挨拶をして顔を上げると、面接官の人はニコニコしながら右手を差し出してくる。ペンを置いて、ズボンで拭いてからその右手を握って握手を交わした。

女子の手ってみんな柔らかいのかな？ ギターやつてる人は硬いのはわかるんだけどな。まっ、そんなことは置いといてだ。明日から頑張りますかね。

Circleを後にした俺はある人物と会うために待ち合わせ場所のカフェに向かっていた。ある人物って言っても香澄なんだけだな。なんでも会わせたい人が居るとか居ないとか。あいつの事だ、どうせ新しい友達とかだろ？ どんな所でも生活していけそうだもん。香澄のコミュニケーション能力さえあれば。

それか彼氏とか？ でも、香澄に彼氏か。ありそうでなさそう。もし仮にたぶん恐らくそうだったとしても、香澄と感性が一緒だったらどうしよう。これから先、香澄2人を相手にしなければいけないのか？

そう考えるだけで背中がぞつとする。まあ、なんにしても普通に接すれば大丈夫だろう。

歩いて数10分。目的地の場所に着いた。遠くからでもわかったが、香澄越しに見える男。あれは友達か？ それとも彼氏か？ いや、平気な顔しておれと仲良くなるような輩だぞ？ 男友達、つまりBoy friendの可能性が大だ。さて………どうする。落ち着け餅つけ砕け散れ。いや、散つちやダメだ。

結局すぐに2人の元には行けなかった。行こうという決心が付いたのは、約束の時間の5分前。一歩踏み出し、覚悟を決めて前に進む。落ち着け………落ち着け俺。Cool downだ。

香澄の後ろまで歩き軽くチョップをかました。すると、後ろに振り向いてくる。目の前の男は驚いてるのか、じーっと俺の事を見てくる。その視線は痛い。

「急に呼び出してなんの用事だバ香澄。こっちは忙しいんだよ」

「え〜良いじゃん！ せつかく会えたんだから！」

「はいはい」

相変わらず変わんないのなお前は。なんか安心したわ。すると思いい出したように香澄が目の前の男を紹介してきた。

「あつ！ この人私の彼氏の石川優都くんだよ！」

ヘエーソウナノカー。どう考えても順番おかしいよね？ 普通俺の紹介が先だよねー？ ほらー向こうの人も驚いてるよー。

「つうかさ。お前の彼氏の紹介よりも、俺の紹介しろよな」

「ごめくん。コホン。改めて紹介するね！ 優都くんに会わせたい人！ 神山恵ちゃん！」

「おい。紹介するときくらいちゃんはやめろ。……あく俺は神山恵。よろしく」

そうやって右手を石川君？ に差し出すと、相手も立ち上がって俺の手を握り返してきた。その瞬間——あることに俺はすぐに気づいたのだ。

手が硬い……しかもこの硬いさは……ギターだ。

「石川優都です。よろしくお願いします」

ギターの事は後で聞くとして、それにしても好青年だなく。俺の第一印象はそれだった。

新たな灯火

香澄の紹介で出会った青年。名前は石川優都。彼とはすぐに意気投合し、名前で呼び合う関係に至った。アニメとかドラマですぐに名前で呼び合うとかしてるけど、正直有り得ないと思っていただけどアメリカではすぐに下の名前で呼んでたから対して違和感はない。

その後カフェでいろんなのろけ話を香澄から聞かされたが、「本当にごめんね」と謝ってくる優都に免じて許すことにした。話を聞く限りでは、優都と俺は同じ高校に通っていて、ギターという共通の趣味もある。今の世の中を考えるとギターとか楽器系の演奏が出来る人は珍しくない。こうしてギターが弾ける人が3人も居るんだからな。

ここまで話して本当に変わらない香澄に驚いている。もう少し大人しめになってたり、落ち着いてる所があつてもいいんじゃないか？ そんなのはここまでの会話で全く感じられない。よくこんなのと付き合ってたこれな優都。尊敬するよ。

「本当に夢じゃないんだよね？」

話が一段落し、頼んだお茶を飲んでいるとふいに優都が尊敬の眼差しにも似た視線を送りながらそう言ってきた。

「ん？ 急にどうした？」

「カスミちゃんが話してた人が目の前に居るからさ。最初はおとぎ話かなにかかと思っ
ちやつたよ」

おとぎ話って……俺は赤ずきんかなにかと一緒にされてるのか？ 失敬な。俺は
ちゃんと実在してるわ。

「それにしてもよくこいつと付き合えるよな」

香澄を指差ししながら言うと、それに気付いたのか「よくってどういうことー!?」と
講義してくる。

いやいや。独特な感性をお持ちのあなたと付き合えるって相当すごいから。これマ
ジな？

「そうかな？ 僕は好きだから付き合ってるだけだよ？」

「お、おう……」

そんな言葉を正面きつて言えるのすごいな……。見ろ、あの香澄が茹でタコのように
顔を赤く——してないだど?! いったいどういう事だ?!

よく見ると若干顔が赤くなっているが、「えへへ♪ ありがとー、ゆーくん」とお礼を
言っていた。その瞬間——俺の心に申し訳ない気持ち湧いてくる。

昔からそうだった。友達と遊ぶ時にその友達が別の仲良しの友達を呼ぶと決まっ

俺は行かない。なんか邪魔しちや悪いよなって思うから。アメリカに行った時もそうだったな……。友達が出来たは良いけど彼女を入れて3人で遊ぶとなると、俺は嘘を付いて逃げた。

邪魔しちや悪い。その感情が強く俺の中にあつたから。

「けーちゃん？ どうかしたの？」

また悪い癖が出たみたいだ。

「女の人じつと見つめて」

「もしかして一目惚れ？」

ん？ 話がおかしな方向に進んでるぞー。ただ一点を見つめてただけなんだけどな。

待てよ。この癖は見る方向によつてはそうなつてもおかしくはないのか。

「違う違う。考え事をしてる時、一点を見つめる癖があるんだよ」

「ものは言いようだね」

「おい」

なぜ恋い沙汰に発展させようとするんだこいつは。

この場に長居するのはよろしくないと思ひスマホ出して嘘を付いた。

「悪い。用事あるから帰るな」

「えーもう？」

「えーじゃないの。また話す機会はあるって。そんな」

そう言いつつ財布から500円を出してテーブルに置いてから背を向けて歩きます。数本歩いた所で「けーちゃん！」と大声で香澄に呼び止められた。周りの人みんな見てんじやん。恥ずかしいな……。

少し赤くなっているであろう顔だけ向ける。

「お帰り！」

「いや。今から帰るんだよ」

「えー!？」

夫婦がお前らは。見事に声をハモらせて。ハモったって何にも景品は出ねえぞ。

前を向いて再び歩きます。買い物袋を持って歩く人が目立つ中、空を見ると少し赤い。

小さい子供達はそろそろ帰る時間か。俺もよくこの時間に家にー・・・帰ってないな。そりやそうだ。家にもってギターを弾いてたんだから。だからあんまり時間にルーズじゃなかった。今はきちんとしてるぞ？ 5分前行動は基本だ。そのせいでいろいろ厄介な事にもなったけど。

ふとおたえに声をかけられた次の日の事を思い出した。5分どころか、15分前に江戸川楽器店に着いてgoogleで調べものしてたら、会ったんだっけか。氷川紗夜先

輩と氷川日菜先輩。

そう言えば2年前に親父がパスパレの特番を録画するのを忘れてたつてすげー嘆いてたな。結局ダビングしてもらつてたまに酔いなが見てたつて。

気が付くと俺は不思議と商店街の方に向かつて歩いてた。今の家は反対方向だ。なぜ商店街に……………。

「はあー。やつぱは真実を確かめたいつてわけか」

頭では良いと思つていても、片隅にはどうしても真実を聞きたいつて思いがあるみたいだ。話すだけだし、そんなに時間はとらないだろう。

引き返す事なく有咲の家に向かった。

わがままは今回だけだ。2度はないと思えよ……………俺。

これ以上有咲の邪魔はしたくない。理由も聞かずに引き離す。これも悪い癖の1つだけど、やつぱり相手に悪いと思つてなかなか言えない。

「ポンコツだよな……………ホント」

賑やかな商店街を歩きながらボソツと呟いた。

商店街を抜けてようやく人とすれ違ふ事がなくなつた。この時間はあまり人が居ないのも変わらないんだな。それはそれで物騒だ。

2年前に久しぶりに有咲と再開した十字路を過ぎ、少し歩くと変わらず黄色の星のシールが張つてある道に出た。少し色あせてるものの、まだびったりと張り付いてい

る。
小さい頃曲を弾けたご褒美のシールを有咲が張つたんだっけなー。もう10年以上経つのか。

昔の思い出に浸りながら歩くとようやくたどり着いた大きな門。表札には市ヶ谷と彫つてある。これも2年前よりは風化しているように見えた。

少し眺めてから門をくぐつて敷地内に入った。石畳の真ん中を歩きながら周りを見る。左にはいつも有咲達が練習している蔵。正面には有咲とばあちゃんが住む家。

あと数本でドアにたどり着くという所で足を止める。ふと右を見ると、有咲が大事に大事に手入れをしている盆栽。前よりも数個増えてる気がする。

今度はいつたいたいどんな名前を付けたんだろう………。変わらず川の名前だろうけど。2代目利根川とか付けてそう。

ふつと鼻で微笑むように笑い、数本歩いてインターホンを押した。少しするとドアが

ガラガラと音を立てて開く。俺を出迎えたのは茶髪の男。人の顔を見るなり、睨むように視線を向けてきた。

「なんのよう？」

「有咲に用があつてきた」

「はっ、取り返しにでも——」

相手の言葉を遮るように淡々と真顔で話す。

「勘違いすんな。話があるだけだ」

「そ、そうか。呼んで来るから待つてろ」

さつきまで俺を睨んでいた目は一瞬で戸惑いに変わった。今まで睨んできた奴に真顔で接してくる奴は居なかつたのか？ と言いたくなつた。

ドアを一旦閉めると足音が遠ざかつて行く。数本下がつて、ため息を吐いた。

本当に有咲はあの男を好きになつたのか？ なんかいざつて時の根性無さそうだし、カッコつけるだけつけて滑つてそうだ。でも……本当に好きならそれでも許そう。他ならない有咲が好きになつた人だから。

そんな事を思っていると再びドアがガラガラと音を立てて開く。そこには若干息を切らしている有咲の姿があつた。

「いきなり押しかけて悪いな」

「べ、別に。話があるって本当？」

「無いのに来るかよ。すぐ終わるから外で良いか？」

「わかった」

そのまま外に出てドアを閉めた。会ったのは2度目なのに、緊張してるのか目を合わせようとしない。

「話って……？」

「他でもない。さっきの男の事だよ」

すると少し間が空いてから、小さい声で「……………ごめん」と謝ってきた。別に俺は責めてるわけでも、バカにしてるわけでもない。

「なんで謝る？」

「約束したのに……破っちゃったから」

約束、か。確かに俺は別れ際に約束をした。有咲を他の男にとられたくないと思ったのかな。あの時、どんな事を思ってたのかはもうわからない。でも……あの言葉の意味を有咲は間違えている。

「お前はバカか？ それで花女のトップだったとか笑えるな」

「なっ！ バカってなんだよ！ こっちは真剣に悩んでるのに！」

「怒んなってー……だってよ。俺が有咲に言ったのは、気持ちが変わらなかつたらだぞ

？」

「気持ちが…変わらなかつたら？」

何を思つて言つたのかはわからないけど、言つた言葉ははつきりと覚えている。

『有咲の気持ちが変わつてなかつたら俺と付き合つてくれ』

そう。気持ちが変わらなかつたら付き合つてくれつて俺は伝えた。だから他の男と付き合つても俺は文句を言う気は一切ない。むしろ俺より良い人が見つかつてなによりつて感じ。一瞬なんか心にぽっかり穴が空いたような感じはしたけど、すぐに忘れた。

「せつかく恋いしたんだから……俺なんかもう気にするな。前と変わらず、仲の良い友達つて事でよろしくな」

しかし有咲は何かを言うことも頷く事もなかつた。悲しそうな表情でじつと俺を見つめ何かを言おうとしたが、俯いてしまった。これ以上は何も話す事はないと思つた俺は「じゃあ」と一言声をかけ振り返つて歩き出した。

これで……良いんだ。これ以上俺が有咲を縛り付けるわけにはいかない。失恋にも似た感覚が心にどつと押し寄せてきたのを振り切るように走りだした。

☆

走って行く恵の背中からは寂しさを感じた。それと同時に私の心に押し寄せる罪悪感。姿が見えなくなるまで目を離せなかった。帰った後もじつと門の方を眺めて、もしかしたら帰ってくるかもと……有り得ない思いも抱いた。

戻って来るのが遅いのが気になったのか、ガラガラと音を立ててドアが開いて聞き慣れた声が聞こえた。

「アリサさん？ 大丈夫か？」

「……うん。大丈夫」

絶対に大丈夫じゃない。大丈夫だったら、涙なんて流してないもん。こんな…悲しい気持ちなんてなるはずがない。

バレないように涙を拭いてから振り向いた。

「戻ろ？」

「お、おう。もうご飯出来てるってよ」

「そ」

「喋るな」

薄暗い廃虚に一瞬だけ大きな音が響く。

俺は戸惑う事なく引き金を引いて男を殺した。拳銃から白い煙と硝煙の香りがする。

「あと……9人」

後ろに居る部下2人に聞こえないくらいの声でボソツと呟いた。

初めてのバイト

今日は初めてのバイトの日だ。あつさり合格をもらえるところでなかったから、いろんなバイト先を探したけど無駄になったな。良い意味で。

朝ご飯のトーストをかじりながらテレビを見てみると、バツチリメイクを決め込んでいるお母さんがリビングに入ってきた。今日はテレビ番組の収録なんだと。

「バイト今日からなんですよ？」

「そうだよ。お母さんも仕事でしょ？ 久しぶりにみたわそのバツチリメイク」

「そう？ テレビに出るんだもの。ちゃんとメイクくらいしないと」

はつきり言ってるうちのお母さんは綺麗だ。性格はややおバカで、頑張り屋。でもスイッチ入るのが遅いのがたまにキズ。インスタント食品が続くいたのが証拠だ。

よく親父と結婚したもんだな。いつたどこに惚れたんだ？ あれか。もしかしたら出来婚とかじゃないよね……？ 親のそういうのを考えるだけでもう、ね？ わかるよな？ 読者様諸君。

「帰り遅かったらなんか買って食べなさい。絶対に台所に立つんじゃないわよ？」
「わかってるよ。そこは気をつける」

「ならよろしい」

なぜここまで台所に立つのを禁止されているのか。それはつい昨日の夜の事である。さすがに料理の1つも出来ないと恥ずかしいと思った俺はお母さんに料理を教えるもらうことにした。

だけどそれが失敗だったのだ。

結果は左手を3ヶ所も斬るという不器用振りを発揮してもれなく絆創膏を貼っている。ここで新たな発見と共に心に深いダメージを追った。

新たな発見とは、楽器の扱い以外はほとんど出来ない。不器用というのがわかったのだ。

心に深いダメージとは、料理1つ出来ないのかという情けない気持ち。

以上2つが昨日の夜に得た結果である。そんな事を思いながら、絆創膏が貼られた左手を見つめた。確かに楽器の演奏以外はほとんどやって来なかったけど、ここまで出来ないとはな……辛い。

「ふふふ。お父さんとそこは一緒ね。楽器以外何にも出来ないんだから」

「その遺伝は要らなかつた……」

俺も雅史みたいに全てに置いて器用になりたかつたー!! 親父と一緒になんて嫌だー!! 同じなのはギターの演奏力だけがいい! そこはまだまだ差は歴然だけど

も……………。

「じゃあ後はよろしくー」

「はいはい」

「返事は1回」

「はい……」

笑顔で「よろしい」と言って、鞆を持ってリビングを出て行った。テレビの音だけが部屋に響く中、トーストをひとかじり。

飲み込むまでテレビを眺め、一旦皿に置いて、お茶の入ったコップを右手に持って口に運ぶ。その間、空いている左手でテレビのチャンネルを変えた。今の時間帯はニュース番組が中心。どこの番組もニュースばかりだ。高校生の時はあんまり興味はなかったが、大学生になってからはちよくちよく観るようにはなった。

「どこの番組も言ってる事は同じだよな」

そう言ってお茶を飲む。

「次の話題はなんと、あの有名ギタリストの神山哲夫さんが映画の主演をするようですね」

話題の内容を聞いた瞬間、噴水のように盛大にお茶を吹いた。

「ゲホッ！ ゲホッ！ はあ?! 主演?! その監督頭おかしいだろ!!」

あの不器用男が……人のこと言えないけども！　なんで主演?!　どうして主演?!　世界は狂ったのか?!

なんとも言えない気持ちがある。頭の中を駆け巡る。頭を掻きむしり、落ち着いてお茶を飲む。

「まずは落ち着けー。文句は言うだけ言った。映画がどうなるかはわからないけど、親父には頑張ってもらおう」

そう言っただけ残りのお茶を口の中に運ぶ。

「今や人気女優でアイドルバンドに所属している白鷺千聖さんまで出演されるなんて、すごいですねー!」

再びお茶が噴水のように吹き出た。

「ゲホッ!　ゲホッ!　え?!　白鷺さんまで?!」

「共演するのは実に1年振りだそうです」

「……………1年振りか」

ふと1年前に起こった出来事を思い出し、テーブルを拭く手が止まった。今考えれば相当ヤバいことをしたよな……。主演女優と混浴って。それにあんなことまで。

懐かしさと恥ずかしさを感じる中、それでも心配する気持ちが強い。

「元気にしてるかな」

たまには思い出に浸るのもいいな。さて……………

「今日も一日頑張りますかね」

薄いカーテンの隙間から見える青い空を見ながら呟く。

視界の端に映るテレビの画面には白鷺さんと親父の姿が映っていた。

食べた物を片付けて戸締まりを確認してから家に鍵をかけて、バイト先へ向かうべく歩き始めた。

もうすぐ4月だというのに時折吹く風は少し冷たい。去年の日本の冬は寒かったらしいな。twisterでよく寒いつていう呟きがすごかったし。アメリカは寒い時はホント寒かった。冬は外出たくなかったから家に引きこもってたな。

だんだん通り慣れてきた道を進むと、ファストフード店が見えてきた。

「そういえば……………見知った人が居たような」

こつちに帰ってきてから一度ファストフード店に入った時、店員さんとお客さんが仲良さそうに話してた事を思い出した。

ピンク色の髪ですごい笑顔が似合う人だったんだよな。声もどこかで聞いた事あったし。……………んゝダメだ。やっぱり思いだせん。

最近物忘れが酷いような気がする……。

数10分くらいでバイト先のライブハウスCircleに到着した。まだ開店前にもかかわらず、外のカフェには人がたくさん来ている。

ライブハウスCircleは外でカフェを開いていて、中ではスタジオの貸し出しやたまにライブが行われている。しかし、2年くらい前まではお客さんはあまり入らなかったらしい。

なぜ今はこんなにお客さんが多いかと言うと、5つのバンドによる大規模なライブの影響とネットには書いてあった。確かガールズバンドパーティーという名前だったかな。

まさか香澄達がね。情報不足乙。

そのお陰で俺の事を知ってる人が増えた。良い意味なら良いんだけど。ちゃん呼びが広まっているのがマズい。非常に非常にマズい。ポピパ内で収まると思っていただけが甘かった。

でも止められることでもない。それはそれで受け入れるしかないか。起こってし

まったことは仕方ないし。

裏口から店内に入るとちちょうど月島さんが居た。

「おはようございます」

「おはよう。そのドアの先にロッカールームあるから着替えてきて」

「わかりました」

「着替えたらここに戻ってきてね。指導する人、紹介するから」

「はい」

スタッフと書いてあるドアをくぐり奥に進む。複数あるドアの内、ロッカールームと書いてあるドアを開けて中に入って、自分のロッカーに荷物を入れた。

「指導してくれる人かー。いったい誰なんだろう」

前に来た時に渡されたエプロンを付けながら、どんな人だろうと思い浮かべてみた。

「優しい人だといいな」

ポケットからスマホを取り出してマナーモードになってるか確認して再びポケットにしまい、ロッカールームを後にした。スタッフルームを出ると、月島さんとなぜか見知った人物がにこにこしながら立っていた。

「……え？ え?!」

「よっ！ 超久しぶりだなー。名人！」

「か、風間さん?!」

目の前には風間さんが相変わらずの笑みを浮かべて立っている。確かに超久しぶりだ。最後にお別れを言えなかつたのが心残りだったけど、まさかここで会えるとは。

「あら? 知り合いなの?」

「はい。引つ越す前からの知り合いで」

「そうそう。自分と名人は相棒つて関係かな」

いつからそんな親しい仲に発展していたのだろうか。別に嫌ってわけじゃないけど、せめて俺の了承をもらつてからにしてくれませんかね?」

「また適当なこと言つてー。神山君を困らせないの」

「あれ? バレてます?」

「2年も見てればわかります」

2年? つてことは風間さんはここで2年くらいバイトしてるのかな? さすがに2年も居れば嘘だつね見抜けるつてわけですか。

「でも乗せられた名人も名人だけどね」

「うっ……。それは否定出来ません」とがつくり肩を落としながら言うと、月島さんはここにこししながら俺達の様子を見ていた。

「ふふっ♪ 仲良さそうで良かった。じゃあお願いね〜風間くん」

「りよ〜」

手をぶらぶら振りながら、軽い返事を返す風間さん。

正直担当の人が風間さんで助かった。知らない人よりかは、ね？ それにしてもこの人も変わらない。軽い所とかアロハシャツの所とかさ。

「よし。そんじゃ始めるとしますか」

「よろしくお願いします」

「堅苦しいのは無しだって。まあ、よろしく！」

「はい」

お互い握手を交わして、初日のバイトが始まった。ミスしないように頑張らないと。気合いを入れ直して風間さんの後を付いていった。

☆

けいが日本を出て2年。花女を卒業したあたしは進学ではなく、就職して働いている。自分が親から受けた事と同じ事されている子供を1人でも多く助けたいと思ったあたしは児童保護施設就職して合格したの。高校で頑張って資格を2つ取った甲斐が

あつて良かった。

今日は午前中は休みだったから、家で気持ちよーく寝てたのに電話一つでその休日も終わり。なぜかありさに呼び出されて羽沢珈琲店に居る。

「早く来すぎたかな……………」

頼んだアイスコーヒーをストローでちびちび飲みながら、腕時計で時間を確認すると約束の時間の15分前。けいと付き合ってた頃の癖で早く来ちゃったよ…………。遅れないようにって言うのはわかるけどさ。それにしてもけいは早く来すぎ。ありさには良く…………言う必要はもうないんだよね。

でも意外。けいが帰ってくるまで誰とも付き合わないと思ってたのに結構あっさり付き合っちゃったからびっくり。けいが知ったらどうなるのかな…………。ありさと喧嘩しなければ良いけど。

アイスコーヒーをかき混ぜるとカランと氷がぶつかると小さい音が響く音を聞きながら、じつとテーブルを見つめていると視界の端に黄色い髪の毛のツインテールが映った。

「遅れてごめん」

「大丈夫だよ。あたしが来るの早かっただけだし」

「うわっ、ホントだ。早く来すぎでしょ…………」

スマホで時間を確認しながら来てそうそう引くありさ。呼び出したのはそっちのく

せにく。なんであたしが引かれなきやいけないのさ。

ありさがテーブルを挟んであたしの前に座ると店員さんが注文があるか聞きにきた。

「有咲ちゃん、優衣ちゃん、こんにちちは♪」

茶髪のショートカットの女の子、があまりさに挨拶をした。ここには結構くるから仲良くなつたんだよね。つぐちゃんは良い子だよ。熱心に話聞いてくれるし。

「こんにちは。アイスコーヒー頼む」

「かしこまりました。今持ってくるね」

今日もつぐつてるね。かしこまりつて言い方がまたつ。

「にやにやするなよ。気持ち悪い……」

「ひどーい。つぐちゃん見てにやにやするのが何がダメなの？」

「全部」

ジト目であたしの事を見てくるありさ。もう罵られるのも慣れちゃった。こう……クセになると言うかなんというか。きつとけいもあたしと同じ事を思ってたんでしよう。

「で、話つてなに？」

いつまでも罵られるのも良いけど話を進めないと。

「うん……。実はね……」

急に視線を逸らして話始めた。

「けいが帰って来たの……」

ケイガカエツテキタノ……？ それってき。うん。

「……嘘。ヤバくない？」

「ヤバいつて言うかー。もう会つちやつたし、彼氏居るの知ってるし」

「もうオワコンじゃん……」

帰って来てるってこと自体で驚いてるけど、会つた上に彼氏居るの知ってるって終わってるよ。けい……落ち込んでなければいいけど。ああ見えて落ち込む時は落ち込むからなく。立ち直れるのかな？

ただならぬ雰囲気の中、つぐちゃんがアイスコーヒーを2つ持ってきた。1つをありさの所に。もう1つをあたしの隣に置いた。

「休憩もらつたから、わたしも良いかな？ ……つて言う状況でも……ないみたいだね」

「まあね。この際だからつぐちゃんの意見も聞こう。よし、どうぞつぐちゃん」

椅子を引いて座るように促して座ってもらつて話を再開。ちなみに言うと、つぐちゃんはいの事も知ってる。もちろん有咲とけいがどういふ関係なのかも。聞いた時、『素敵な関係だね♪』って羨ましそうに言つてたつけ。でもね。そこにたどり着くまでが大変だつたんだから。

「思い出に浸ってる場合じゃねえだろゆい」

「元はと言えばありさのせいじゃん」

「そうだけど……」

「まあまあ2人共」

言い合いになるとだいたいつぐちちゃんの一言で止まる。一旦心を落ち着ける為にアイスコヒーをストローで飲んだ。

「深刻そうな雰囲気だったけど、どうしたの？」

「うん……。何から話そうかな」

「最初からで良いんじゃない？」

「そうだな」

話は数ヶ月前に戻る。

どうしてあの時ありさの事を止められなかったんだろう……。資格の試験で忙しかったなんて言い訳にしかない。資格試験なんていつでも受けられた。でも、ありさとの関係はここで終わるかもしれない。そう考えるだけで、罪悪感が湧いてくる。

けい……あたしはどうすれば良かった？

好きになる瞬間——

恵に出会う数ヶ月前。この日の学校終わりに香澄の彼氏の優都と合流した私達は蔵に向かつて歩いている。楽しく会話を弾ませているみんなとは少し距離をとって一人考え事をしていた。

私は一人の男にストーカーにも等しい事をされていた。マジで通報しようかと思っただけど、本人に悪気は一切感じられず、香澄達も悪い人じゃなさそうって言うてるし。つかしつくこくされてるのは私なんですけど……………。

そいつの名前は鍋川始。超が付く程のバカ…というよりアホ。女子と話した事がないのでかっつて言いたくなるくらい会話が弾まない。例えると空気がもう少しでなくなりそうなサッカーボールが弾まないくらいに。会話が下手でもこつちから話題を振ればある程度は話せるから問題ないとしても、やつぱり圧倒的にアホ。小さい段差でつまづいたり、言った飲み物とちがうた飲み物買ってきたりする。これをアホと言わないでなんて言う？

おたえと沙綾と香澄は面白い人じゃんって問題視してねえし。優都とりみは心配してくるけど、悪い人じゃないって。みんな人事みたいにさ……………。

香澄なんて私達が居るのにイチャイチャして幸せそうな顔してるんだよな。………恵が居たら私もあんな感じに……ならねえな。恥ずかしいし。

てか、なんで私なんだろう……。沙綾とかおたえとかりみとかならわかるけどさ。私なんか素直になれない上に口も悪い。こんな私のどこが良いのかな？ もの好きな奴。

「有咲大丈夫？」

距離をとって歩いていると沙綾がふらつと私の隣にやってきた。

「え？ あ、うん……」

「大丈夫そうじゃないね。またあの人の事考えてた？」

「まあ……」

沙綾はこういう時にはちゃんと気遣ってくれる。恵が居なくなつてからは余計に。なんでそこまで気遣ってくれるのかって聞いた時、『なんとなくかな』って言つてたけどそんな事はないと思う。サポートするのが好きな沙綾の事だから根かいもそれかな。

「良いね、有咲は。自分を好いてくれる人が居て」

「それなんも嬉しくねえ。アホに好かれても……」

そつぽを向きながらそう言うと、沙綾はふふつと微笑む。間を開けて答えづらい質問を投げかけてきた。

「やっぱけいちゃんが良い？」

「……………どうだろう」

恵が居なくなつてから最初の1カ月は凄く会いたかった。さすがに1年以上経つと気持ちも薄れるっていうか……平常に戻ったというか。好きな気持ちは変わらないけど、今すぐに会いたいってわけじゃない。

つまりあのアホと恵は比べるまでもないってこと。10対0でコールド負け。

「そんな事言つてると、あたしが取っちゃうよ〜?」

「前にそれで騙されたからやめてくれない?」

「あの時の有咲スゴい顔赤かったよね〜」

もうマジでやめてほしい。沙綾の罠にはまって恵に対する気持ちがバレた。別に隠したかったわけじゃないけど、話す気もなかった。だって……恥ずかしいじゃん。2人の秘密にもしたかったし……。

「早く帰つてると良いね」

「うん」

前なら『別に』つて言つてた。でも今は早く帰ってきてほしい。

「アリサさーん!! 見つけましたよー!!」

うわっ来たよ……………

走ってきたのか息を切らして私達の目の前に立つ。そのアホずらを見るのは何回目

だろうか。いい加減にしてくねえかな。今日こそはしつかり断らないと。

「あの。もう付きまとわないでくれま——」

いざ注意しようとしたのに、言葉を遮るように告白してきた。

「付き合ってくださいーい！」

「話聞けよ!!」

今ので15回目なんですけど……。普通1回断られたら躊躇すると思うんだけど、コイツに至っては躊躇どころかそこから加速していった。マジでふざけている。

アホを睨みつけていると、優都が笑顔でとんでもない事を言った。

「あ、また来たんだ。負け戦大変だね」

「んだとゴラ!! カスミさんと付き合えてるからって調子乗んなよ！」

顔に怒りマークが見えるくらいの表情で優都に対抗するアホ。これもいつもの光景なんだよ。

「調子に乗りっぱなしなのは君だよね？」

「ちげえし！」

違わねえよ。調子に乗ってるのはお前だって。

「とりあえずあの声マネやってよアホ川くん」

おたえもドストレートに悪口を正面から言った。うちのバンドメンバーには常識人

は私とりみと沙綾だけって事はわかる瞬間だな。

「し、仕方ないっすね。姉御がそう言うなら」

結局誰でもいいんじゃないか。私の事を好きって言う割には誰にでもデレデレするんだよなコイツ。なんかムカつく。

一旦後ろに向いてから咳払いをして前に振り向いた。表情は、星の玉を7つ集めると願いが叶うアニメのプライドの高い王子の顔に似せにいつてる。

「クソつたれがー!!」

そして沈黙。

最初に口を開けたのはおたえ。

「この言い方は似てるけど、声は全く似てない感じがアホ川くんだよな」

「おたえちゃん……それは言い過ぎだよ。本当かもしれないけど」

「りみ。普通にとどめさしただけになってる。もうアホのライフは0だぞ」

フツたおたえもおたえだけど、こうなる事がわかって乗るアホもアホ。いつになったら成長するんだよ。

こうして私への告白は毎回のように失敗。こうなると普通、顔も合わせたくないと思

うんだろうけど生憎、アホにはそういう感情はない。毎日、帰りに告白しては振られ告白しては振られるの毎日をループしている。同じ時間をぐるぐるてるんじゃないかって錯覚してしまうほどに。

「じゃあ楽しませてもらつたし、そろそろ行こつか？」

「そうだね♪」

「じゃあね。アホ川くん」

「あつ、はい！　では！」

笑顔で私達を見送るアホの横を通り抜け蔵へと歩きだした。これは新しいパターンじゃね？　笑顔で見送つてるのに置いてかれるアホも気付かないんだ。

「あれ？　おれ置いてかれてる？」

気付くの遅っ！

結局、蔵練にアホも付いてきた。優都はギター弾けるから、香澄とおたえとりみの4人でギターパートの事を話したりしてる。その間、私と沙綾はそれぞれ1人で確認。対してアホは買い物に行かせたり、ガヤ担当だったり不遇な扱い。なのにそれでも楽しそ

うにしているアホを見てみると、楽しい気持ちになってくる。

それを正面するように私以外はみんな笑ってる。その笑いがバカにしてる笑いなのか、面白くて笑ってるのかはわからないけど……たぶん面白くて笑ってるんだと思う。

はあー……もうわかんねえ。

アホに対する気持ちの変化に自分でもわからなくなっていた。

蔵練が思ったよりも長引いて気付けば遅い時間になってた。片付けは私1人でやると押し通してみんなには帰ってもらった。1人で考える時間が欲しかったからちやうど良い……。

お菓子の入ってない袋をゴミ袋に入れてみると、階段を下ってくる足音が聞こえた。視線を向けるといつもと変わらぬ笑顔で言った。

「やっぱ手伝いにきた」

「帰れよ」

「相変わらず冷たいね。でもそこがまた」

「キモい」

アホを無視して部屋の片付けを再開すると、私の横でガサゴソと片付けを始めた。

「なんで……私に付きまとうわけ？」

「なんでって。理由は1つ。アリサさんが好きだから」

普通に息を吐くように言ってくる。一瞬ドキドキしたけどそれが逆に苛立った。

「だからっ！ ……前に話したじゃん。好きな人が居るって」

「でもその人は今ここに居ない。アリサさんを置いて外国に行つて……おれはそんな事にぜーったいにしない！ それだけは約束出来る!!」

迷いが無い瞳で私の事をじっと見つめてくる。その瞳からは嘘は全く感じなかった。ダメなのはわかっていても、ちよつとだけならと心を許した。

「それに……こんなバカなおれでもちやんと見てくれるのが嬉しかったんすよ」

「べ、別に……お前がしつこいから……」

「ごめん……恵。」

最初はうざいだけだったのが最近はずっとその気持ちが変わりつつあった。今まで男の人で真つ正面から『可愛い』とか『好き』とか頻繁に言ってくる奴なんて居なかったから、妙にそれが嬉しくて……心に響いた。

☆

「痛っ」

リビングのソファでギターを弾いていると、突然プツンという音と共に弦が2本切れる音が響いた。その拍子に左手の親指を切ってしまい、血が溢れてくる。

「あんちゃんどうかしたの?」

近くで本を読んでいた雅史が本にしおりを挟んで俺の元に来た。

「ん? ああ。弦が2本も切れた……」

傷口から出てくる赤い血を近くにちようどあつたティッシュでふき取りながら答えた。

「二昨日、交換したばっかだよな?」

「そうなんだよ。まあ、切れたもんは仕方ない。また交換するさ」

「そっか。救急箱持ってくれね」

「サンキューな」

とりあえずギターを下ろして雅史が戻って来るのを待つことにした。ふと外を見ると真つ黒な雲が押し寄せている。まるで不吉な何かを暗示しているかのように。

なんだろう……この胸に突っかかる感じは。



「つて話」

ありさの過去の話が終わったけど、誰も言葉を発さなかった。何かを言わないといけないのに、何にも言葉が浮かんでこない。ちびちびアイスコーヒを飲んでみると、つぐちゃんも口を開いた。

「なんか……複雑な話だね」

「うん。つぐちゃんの言ってる事は合ってるよ。でもね……これはあたしの勝手な願いだから適当に聞き流して」

何にも言葉が思いつかない中、ありさが付き合い始めた頃に思った事を打ち明けることにした。自分勝手な事ばかりで、嫌な気持ちにさせちゃうかもしれないけど……これだけは伝えたい。

「けいとありさが仲直りした時にね。2人が仲良くこの先、ずっと一緒に居てくれた

ら嬉しいうちで。あたしのせいで仲悪くなっちゃったし」

すぐでありさの顔を見ることが出来なかったあたしはアイスコーヒーをストローでゆつくりかき混ぜた。カランカランと氷同士がぶつかる。

「ゆいの気持ちはわかった。その……心配してくれてありがとう」

「ううん。あたしの方こそ本当にごめん。幸せになつてよね、ありさ」

いい雰囲気の中、あたしの隣でつぐちゃんが涙を拭っていた。

「ごめんね。なんか感動しちゃって」

「もつとつぐちゃんは涙もろいもろいんだから」

「私とゆいの間にあった事を話した時も泣いてなかった？」

「あく確かに」

本当につぐちゃんは優しいね。けいとありさと仲良くなつてから友達と呼べる関係の人が増えたな。彩先輩に何度も謝った時は、すごい困つてたっけ。

「どうしたの？ 遠くを眺めて」

「ううん。なんでもない」

この日常がずっと続きますように。



遠い未来。

薄暗い森の中。今、私の目の前にはかつて好意を寄せていた彼が真っ黒なスーツの上にコートを着て、拳銃を迷う事なく私の額に照準を合わせて立っている。後ろにはその彼に怯えて地面に座り込んでいる男が一人。

「一度しか言わねえぞ？　そこをどけ……有咲」

私を容赦なく睨みつける目には一変の曇りが無い。恵が撃つ気になれば本当に撃たれる勢い。ゴクリと唾を飲み込み、目を逸らすことなく言った。

「やだ」

その瞬間、拳銃が大きな音を立てて弾丸が地面に向けて放たれた。拳銃からは白い煙が出て、嫌な匂いが鼻をつく。それでも私は少しも引かずにそこに立った。ここで恵を行かせてしまったら本当に戻って来れない気がした。これ以上恵に人を殺してほしくない。私の頬にそつと触れた、大きくて暖かい手が血にまみれていくのが怖かった。

「次は……当てる。最後の警告だ。そこをどけ」

低く唸るような声でどくよくに指示されるも、無言でじつと恵の事を見る。お互いを見つめ合うというラブコメのような展開の中、一瞬だけ恵の視線が左にそれた。その瞬間、私は左手ぐつと引き寄せられ、視界左に大きくずれる。

「死ねー!!」

大声の次に銃撃音が響き、衝撃が私の体を襲った。なにが起こったかわからないまま3回目の銃撃音が響く。

「ぐー・がつ?!」

地面に横たわりながら撃たれた男の人を見ると右肩から真つ赤な血をダラダラと流していた。テレビ越しやスマホの画面越しで見ているものと同じ血。鉄が濡れた時のような匂いが漂ってくる。酸っぱい胃液が少し上がってきたのをこらえながら上半身を起こした。

私を庇ってくれた恵は怪我一つない様子で、男の人が持っていた拳銃を回収してコートのポケットにしまい込んだ。

「有咲越しに撃つ……か。それがお前の答え、なんだな?」

今度は右の胸ポケットから西部劇でよく見る銃を取り出した。それを私に向けた時と同じように男の人に向けて、躊躇いもなく引き金を引いた。

4 回目の銃撃音。

男の人は額から赤い血を流してピクリとも動かなくなった。強い吐き気が襲ってくる。思わず口に手を当てて死体から目を逸らした。

私の好きな人はどこで道を間違えたのか無表情で躊躇いもなく人を撃ち殺す人になつてしまった。

「あと……8人」

ボソツとそんな言葉が聞こえたつかの間、何かで口と鼻を抑えられた私はなんの抵抗も出来ずにまぶたを閉じ、眠った。

久しぶりの再会

「はああー。づがれだー」

午前中のバイトを終えて休憩室のテーブルにぐだーと横たわる。アメリカのライブハウスでバイトしてたとはいえ向こうと違う機材のチェック、おまけに女子率の高いカフェの接客。さすがに堪えるぜ……………。

ライブがある時はもっと大変だつて風間さんが言つてたっけ。つうか夕方にライブあるつて言つてたな。ヤッター今日の夜はぐつすりだ。

てか、こんな疲れるのかくバイトつて。へらへらしながらなんでもこなす風間さんが羨ましいよ。けどここでいろんな知識がわかるからそんなに苦でもない。辛いつて思ひより、面白いつて思ひの方がまさつてるからかな？　なににせよここで折れるわけにはいかない。

「頑張るか」

お昼食べようと持つてきたやまぶきベーカリーのメロンパン。これを食うのは何年振りだろうか。袋から取り出して、半分にする。ふわっふわっのパン生地の上には甘い匂いがするビスケット生地。まずは匂いを楽しむ。

「久しぶりだわ〜この甘い匂い」

匂いを楽しみ、メロンパンにかぶりつく。口全体にビスケット生地の良い味とふわふわのパン生地が広がる。いやいや……………。

「2年振りのやまぶきベーカリーのメロンパン美味っ！買った甲斐があるな〜」

至福の時間はあつという間に終わってしまう。だがしかし。

「2つ目があったり」

2年振りに食べるのに1つなわけないだろ？ ホント最高だわ〜やまぶきベーカリー。今度沙綾にお礼言っておこう。でも、買いに行つた時に沙綾に会えなかったのが心残りかな。みんな大きく変わり過ぎてなきやいいけど。んまあ、香澄がああの調子なら大丈夫そうだけだな。

メロンパンを食べていると、休憩室のドアが開いた。入ってきたのは鞆を持った月島さんだ。

「お疲れ様です」

「お疲れ〜。あつ！ それってやまぶきベーカリーのメロンパン？」

「はい。好きなんですよーあそこのパン」

「美味しいよね！」

さすが月島さん。わかってらっしゃる。

俺の前に座ると鞆から見覚えがありすぎる茶色の紙袋を出した。やまぶきベーカリーでパンを買おうと入れてくれる紙袋から取り出したのはチョココロネ。俺も好きなやつだ。

「やつばこれだよね♪」

「ですな」

チョココロネを見ると頭に浮かぶのは1人しか居ない。俺と同じくらいパン（主にチョココロネ）が大好きなポピパのメンバーの牛込りみ。あんまり話さない印象が強いだろうけど、知らない所で結構話してる（主にパンとギター）。

「どう？ ライブハウス。向こうとこっちは」

「ん〜まだ慣れないですな。向こうと違って女子率が高過ぎて……」

「やつぱり？ ここでバイトした人みんな同じ事言ってた」

ニコニコしながらそう言った。この人結構な頻度で笑ってるような気がする。怖いよりは全然いいけど。

「あつ、そうだ」

すると何かを思い出したのか急いでチョココロネを食べ進め、ひと段落ついたところで、さつきよりも落ち着いた感じで話始めた。

「今日の夕方のライブで *Pastel*Palette* が来るんだけど、リハ来てみ

ない?」

「pastel*palettesですか……。貴重な体験なんで是非行きたいです」

「OK。じゃあ来たら教えるからスタジオに来てね」

「はい」

パスパレか……。つてことは白鷺さんも来るつてことだよな? 来なかったらそれはそれでおかしいし。……………気に病む必要なんてない。いつも通りにしてれば良いんだ。変にしてくれると、またからかわれるかもだし。

「そうだ。今度、神山君のギター聞かせてくれない?」

「良いですけど……。急にどうしたんですか?」

「こういう仕事してるし、単純に聞いてみたいからかな」

「そうですか」

そうだよな。好きじゃなかったライブハウスで働こうなんて思わないか。

今まで純粋に俺のギターを聞きたいと言ってくれた人は結構稀だ。親が親だから仕方ないんだけどさ。それだけ有名なんだよな……。親父は。まあ話を戻すとああやって純粋に俺のギターを聞きたいって言ってくれるのは嬉しいつて事だ。

休憩時間が終わり、俺は午後のバイトへと戻っていった。

外のカフェでの接客をこなしつつCircleに入っていく人をチラチラと見ていた。

別に女の子が見たいとかじゃないからね？ 今日の夕方のライブに出演する人か
なつて感じて見てるだけだから。それ以外に他意はない。

あつ、あの子可愛いな。

おい！ というツツコミを入れたいだろう。だがそれをぐつとこらえてほしい。俺
だつて健全な男の子だ。可愛い子が居れば自然と目がいつちやうだろ？ それと同じ
だよ。ギター上手くても、親が有名人でも中身は男でーす。

とまあ女子を敵に回すような言い方をしたのは素直に謝ります。すみません。
心の中で1人芝居をしているとゆつたりとした声のお客さんに呼ばれた。

「すいませくん」

「はい。ただいま」

どこかで見ることがある灰色のショートカットの子と服の上からでも大きいとわか
る胸の女の子が居るテーブルに向かう。

なんか……どこかで見覚えが。はっ！ これはもしかしてデジャヴか?! でも夢で

見た覚えもないんだよな。ん〜気になる。

女の子2人の元に向かい注文を聞きにきたはいいものの、ショートカットの女の子がじーつと俺の事を見てくる。非常に注文が聞きづらい……………。

「ご注文は？」

無言。

「あのご注文は…………？」

またしても無言。

なんか喋れよー!! 注文聞きづらいでしょうがー! そんなに暇じゃないんだよこっちは!

「ちよつとモカ! じーつと店員さんのこと見ないの!」

小声(普通に聞こえてる)で俺のことをじーつと見つめる子を注意するも無視。いい加減にしてほしいものだ……………。

「忘れちゃったの？」

「…………えつと。注文まだ聞いてないんですけど〜」

「あたしだよ。モカちゃん。パン屋で仲良くなった」

パン屋で仲良くなった……………それにこのやけにゆるーい喋り方。むむむ。

「……あ！ あの時の?！」

やっと思ひ出した。そうだそうだ。確か高校生の時にやまぶきベーカリーで出会ったんだっけか。パン好き同士速攻意気投合したな。懐かしい思ひ出だ。

「つうか覚えててくれたんだ」

「まあね。顔みたらすぐ思ひ出したよー」

「今の今まで忘れてたよね? それ」

ピンク色の髪をおさげにしている子が、ジト目でそういうと俺に視線を向けてきた。

「フルーツタルト2つお願いします」

「あつ、かしこまりました」

一旦モカ達の元から離れて注文されたフルーツタルトを2つ持つて戻った。モカの前に1つ、おさげの子の前に1つフルーツタルトを置く。するとモカはフルーツタルトに乗った皿をそーっとテーブルの上を滑らせ、おさげの子に渡した。

「ひーちゃんが2つ食べるんだよー」

「ちよつとモカ! 店員さんが居るところで渡さなくても……」

頬を赤らめて恥ずかしがるおさげの子。なぜ恥ずかしがる必要がある? 俺は何も言つてないのに。別にたくさん食べるのが悪いとは思わない。むしろ世の中美味しい食べ物がたくさんあるのに、無理して食べないとか正直もつたないと思う。

「たくさん食べるのは恥ずかしい事じゃないよ。俺はそういう子の方が良いと思う」
「あ、ありがとうございます……」

俺の一言でさらに顔を真っ赤に赤くしてしまった。そんな追い込むようなことを言ったかな？ そうしてしまったなら素直に謝ろう。

「あーえつと、すいません」

「い、いえ……」

「では、ごゆっくり」

それだけ言い残してその場から急いで離れた。

すごい顔赤かったけど……大丈夫なのか？ あんまり余計なことを言い過ぎると良い思いはしないんだよな……。無駄に期待させちゃうとか、勝手に相手に好意もたれるといういろ……。それはないか。自意識過剰にも程がある。

頭を左右に振って与えられた仕事をこなしていった。

☆

さっきの人、すごく優しくなったな。てつきり引かれると思ってたけど、そんなことなくて良かった。顔もまあまあ良かったし、彼氏候補に入れてあげても良いかな。なん

てね。でもそろそろ彼氏欲しいよ……。

「いや〜。こんな所で出会うとは」

「あの人がずーっと前に言ってたパン屋で出会った人で良いんだよね？」

「そだよー。それにーあの人がポピパが言ってた人だったり」

「えー?! あの人が?!」

周りに迷惑がかからない程度に叫んだ。

2年前にCircleでライブした時にポピパの人達が言ってたすごい人なんだ〜。そんな風には見えなかったけど、どこら辺がすごいのかな? 誰にも出来ない特技があるとか?

すごい人と聞いていろいろ妄想していたわたしだけど、一番大事なことを忘れていた。

「ねえモカ。あの人名前なんて言うの?」

「……店員さん」

「絶対違うよね?」

「えつとね〜。神山……かい?」

「わたしに聞かれても……」

本当に知り合いなんだよね? それで名前忘れるってなかなかひどいねモカ。ん〜

どうしよう。読んで聞いた方が早いよね？

「すいませーん」

「えっ？ ひーちゃんまだ食べるの？」

「違うよ。呼んで聞いた方が早いと思っただの」

さすがにこれ以上食べたなら太っちゃうよ……。ダイエツトしなきゃ。

少しするとさっきの人が注文をとりに来てくれた。

「お待たせしました。ご注文は？」

「紅茶一つ。モカは？」

するとメニューも見ずに少し考えた後、「じゃあーカフェモカー」と昔から変わらな

い緩い喋り方で伝えた。

「以上でよろしいでしょうか？」

「はい。あの！ 名前聞いても良いですか？」

「名前？」

少し困った表情のまま数秒。

「……神山恵、ですけど」

「恵？ かいじゃないじゃくんモカー」

「惜しかったね。まあ、そういう事もあるよー」

もーモカはいつつもこうなんだから。人の名前をその人が居る前で間違うなんてわたしだったら恥ずかしくて、顔赤くなっちゃうよ。

「(なんだこの状況)」

「あつ、以上です」

「かしこまりました……」

苦笑いを浮かべてそう言うのと神山さんは一旦戻っていった。その後ろ姿を視ていると、首を傾げてあれはなんだったんだ？ と聞こえてきそうな雰囲気漂わせている。

悪いことしちゃたかな？

☆

さっきのはいつたいたいなんだ？ よくわからなすぎて話が全く入ってこなかったぞ。とりあえず俺の名前は神山「恵」だと言うことは覚えてほしい。かいではないです。つうか聞いてきた本人の名前知らんのだが……。

紅茶とカフェモカをお盆に乗せてテーブルに向かう。紅茶とカフェモカを頼んだ人の前に置いた。

「いやいや悪いね。わざわざ持ってきてもらっちゃって」

「これが俺の仕事だよ……」

ボケ担当かお前は。普段からこんな感じだとしたら、バンド内でもそういう立ち位置なんだろうな。でもなんだろう……前の日常に戻った気がするの俺だけだろうか。ボケる人が居て、それにツツコンで。アメリカではそういう感じでもなかった。あいつ元気にしてるかな……………。

ずっと話しているわけにもいかない為、仕事に戻ろうと振り返る。

「……………」

俺の視線の先にはニコニコしながら人気女優声をかけてきた。

「久しぶりね。元気だった？」

非日常の間違いだったわ……………。

変わる想い

ニコニコしながら手をひらひらと振る白鷺千聖。俺の最も苦手な部類に入る人間だ。一緒に居ると彼氏みたいな感じになってしまふから。相手が美人や可愛い人だと妙に話題が湧いてこない。そんなのは可愛いもんだ。じゃあ何が問題かって？ そんなもん決まってる。

この人は平気で俺に接してくるからだ。

それの何がいけないかって？ 無防備過ぎる所だよ。記者や週刊誌は恋愛ネタが好きだからな。手を繋いでいた所を写真に撮られたり、議員の不倫が現に撮られて大変な騒ぎになったのは記憶に新しいはずだ。そう考えるともう夜も寝られない。

本人はそれが気にならないのかぐいぐい近寄ってくるのは、バイト中なのに話かけてくるはもう大変。今は人の目があるからやめてくんない？ わざとやってるのは知ってるんだから。

「せっかく会えたのにそんな目で私の事を見るんだ」

「言い方！ ……話なら後でしてやるから、今は勘弁してくれ。バイト中だし」
「じゃあ、後でね？」

妙に後でという言葉を強調して伝えてきた。なぜそこまで俺に執着するのだろうか。2年前の出来事はあの場で終わったはず……いや。その場限りという事をちゃんと伝えたはずだ。それなのにしつこく絡んでくる。遊ばれてるのか、俺の事を好きなのか……その可能性はないか。

白鷺さんの背中を見つめぬがら、小さくため息を吐いてバイトへ戻った。
やっぱり苦手だ。

パスペレのリハーサル。正直に言うところだった。演奏能力、曲、チームワーク。どれをとっても上手い。さすがアイドルバンドだ。あの親父が酒が入ってたとは言え絶賛してた理由がよくわかる。

ボーカルの丸山さんは歌唱力高いし、結構引きつけられた。そう言えば前にファストフード店で見かけたな。

ギターの日菜先輩。これはもう……ね？ 余裕が見える。でも演奏はしつかりして

いるから問題はないな。前に親父から聞いたけど天才らしい。けど、間違えた時の修正力がなくとボヤいていたのを覚えてる。

ドラムの大和さん。メガネかけてる時は正直、アイドル？ と少し疑う部分もあったけど、メガネを外したらあら不思議。演奏能力もさすがの一言。

キーボードの若宮さん。パスパレの紅一点って感じかな。5人の中で1人だけハーフ？ だから浮くんじゃね？ と思ってたけど見ててなんの違和感もなかった。演奏能力も高い。

最後に白鷺さん。この人はふざけてるのか、時折俺の方に視線を向けてウインクしてきた。リハーサル中だぞとツツコミたい気持ちをもぐつとこらえてたけど。それだけ余裕があるんだろう。

親父にたまに指導してもらってたとしてもだ。個々の演奏能力の高さには驚いた。普通に勉強に菜つて立ち会えて良かった良かった……リハーサル後に楽屋に呼び出さなければ。

「この人が神山さんの息子さん……」

「そうだよ！ 神山けー！」

「いやそれ俺のセリフ……」

紹介してくれるのはありがたいけど、そのけーってなんなんすか？ もうイニシャル

じゃん。頭文字Kになっちゃうよ。運転したことないぞ。

「皆さんの事は親父に聞いてますよ。リハーサルすごかったです」

「まあね〜！ 余裕余裕」

「またそうやって調子に乗つてると、間違えるわよ？」

「大丈夫だよ。間違つてもすぐに修正するから」

「本当に？」

「うん！」

なにこの会話。俺入っていけないじゃん。これはあれか？ もしかしたら、もとかから入るスペースなんてなかったんやっていう状況か。なるほどくしくりくるな。……くるかよ！

「てつおさんから聞いたんすけど、いろいろな楽器が演奏出来るとか」

2人の会話を眺めているとキラキラした視線を向けて大和さんが話かけてきたが、質問にすぐに答える事は出来なかった。ん〜と少し唸つてから、出来るだけがっかりさせないような答えを探す。

「前はつて言つた方が正しいですかね。今は笑えない程、出来ません。すみません」

「あついいえ！ じぶんの方こそ、早とちりしてしまつてすみません……」

「謝らなくて大丈夫ですよ。悪いのは全部親父なので」

この場は一旦笑い話で済ませる事に成功した。親父よ感謝するぞ。とりあえず一通り親父のせいにしておこな?

後話してないのは、丸山さんと若宮さんだけか。でも無理して話す必要もないよな。すると若宮さんが唐突に耳を疑うことを聞いてきた。

「ケイさんは彼女が5人居るんですか?」

「……はい?」

唐突に人を女たらしみたいなことを聞いてきたは若宮さん。その意図は不明だ。この人ぶっ飛び過ぎだろ。ほら丸山さんなんて目のハイライト失ってるもん。完全に人をゴミみみたいな目で見てるよ。

それぞれ、様々な反応を示す中、とりあえず落ち着いてこの状況を解決していこうか。「まずね、俺に彼女は居ないです。女たらしでもないですよ?」

「でもテツオさんが、ケイにもようやく彼女が出来たのかうって顔を赤くして言っただけ!」

「……とりあえず全ての元凶はあの親父か。とりあえず、酔ってる時の親父は嘘の塊みたいなものであんまり信じないでくださいね?」

そう……うちの親父は酒に酔うと平気で嘘を付くとんでもない奴なのだ。今度北海道に連れてつてやる！ とか言つてた割には連れてつてくれなかつたし。お小遣い増やしてやる！ とかも嘘で……殆ど嘘の塊だな。

「5人つて、ポピパの子達じゃないのかな？」

救いの手を差し伸べてくれたのは意外にも丸山さんだった。さつきまで人をゴミみたいな目で見てたのに……。でも乗らない手はない。

「そうです！ 香澄達の事なのでお気になさらず」

「なーんだ。つまんないのー」

人のスキャンダルがそんなに楽しいのか？ 若宮さんの一言でこっちは死にかけてるんだよこんちきしよう。全部親父のせいや。

一時はどうなることかと思つたが、話は意外と弾んだ。主に親父の話とかバンドの事とか。

丸山さんは香澄と仲が良いらしい。なんでも同じ一番星を目指してるだとか。……なんか違う気がするんだよな。香澄がアイドルの一番星を目指すわけがない。この2年でアイドルに目覚めていなければ。

若宮さんは高2の時に香澄達と同じクラスで友達なんだと。

ガールズバンドパーティーがあつてから交流の輪が広がつたみたいで、たまに対バンとかもしてるみたいだな。それもどれも月島さんの提案だとか……。なんだろう、そんなすごい人だとは思わなかつた。見た目では判断出来ないこともあるってことさ。

「じゃあ、そろそろバイトに戻りますね」

ずっと話してるわけにもいかない。俺はバイトでここに来ているのだ。あんまりサボると、ね？ 風間さんが大変そうだろうし。

「急に呼び出してごめんなさいね」

真つ先に白鷺さんが声をかけてきた。それに「いえ。楽しかったので大丈夫ですよ」と作り笑いを浮かべて答える。それを見た白鷺さんはふふつと口に手を当てて笑う。俺の作り笑いに気づいたのか？

「香澄ちゃん達によろしく言っておいてください」

「はい。ライブ頑張ってください」

「ありがとう♪」

笑顔で答える丸山さん。その笑顔について視線を逸らしてしまったのをバレないように背を向けて楽屋をあとにした。これでようやく仕事に戻れ——

「あー！ けーちゃんだー！」

この声。その呼び方。もう1人しか心当たりがない。ゆっくり顔を向けると案の定香澄達、Poppin, partyの面々。

「本当だー。何でここに居るの?」

沙綾の質問に「バイトだよ」と簡単に答える。……なにこのバツトタイミング。さつきパスパレを相手したのに今度はこいつらか。つうかなんでここに?」

「なんで居るんだ?」

「Pastel*Palettesのライブを見にきたの」

俺の質問に答えてくれたのはりみ。

「そうとか」

香澄、おたえ、りみがギターケースを持っていないということはそのなかのだろう。にしてもこうして見ると見た目は変わらん。変わったと言えば状況だけか。

「背、伸びたね」

おたえの方に視線を向け、手を上下させながら言った。

「まあな。お前らが縮んだんじゃねえか?」

「この年でもう縮み始めるの?」

「いやそういうことじゃねえよ……」

おたえのわけわからんところも変わらない。それがおたえの魅力みたいなものか。

「本当に帰ってきたんだね」

不意に沙綾が改めて言ってきた。なんせ約束したからな。俺がここに居るのはお前達のおかげでもあるんだよ。

「ああ。また会う日までって言ったろ？」

「確かに！」

「積もる話もあるだろうけど、悪いけどまた今度な」

香澄達の間を通り抜ける一瞬——有咲と目があつたが、また逸らされた。

この前に話した時から妙な違和感を感じていた。なんか変に距離があるような……。もしかして避けられている……のか？ この間の対応間違つてたかもだな。でもあそこで別れるなんて言えない。

まだ俺と有咲の間には溝があるようだ。

数時間後。無事ライブも終了しバイト終わった。今日のバイトは初日で疲れたな。別の意味で……。けど、みんな元気そうだなによりだ。

着替えを済ませてまだ仕事をしている月島さんと風間さんに挨拶するために一度荷

物を盛ってスタジオに戻った。

「先、失礼します」

「はいよー。お疲れさん」

「お疲れさま」

「お疲れさまでした」

挨拶を済ませて外に出るとすっかり辺りは暗くなっていた。時間帯もそれなり。ライブハウスでバイトすると終わるのが結構遅くなる。ライブの時間帯によるけど。

街灯が照らす帰り道を一人歩く。

「静かだ……」

夜でも車が行き交っていたアメリカとは違い、人一人居ない。世界で自分一人しか居ないみたいだ。自分一人しか……。

一人だった時の有咲もこんな感じだったのかな。結局俺は学習してないってことか。遠慮して引く。いつになったら俺は変わるの？ 人は変えられるのに、自分自身を変えられないとかお笑いだよな。

「ホント……バカだな」

立ち止まって星が輝く夜空を見ながら言った。答えてくれる人なんて居ない。もはや一人事だ。

「それな。お前は本当にバカだよ。約束一つ守れないんだから」

聞き覚え……いや。どう考えてもあいつの声だ。お前だけは俺を見放さなかったんだな。

後ろに振り返ると街灯の光に照らされたあいつの姿がそこにあった。

「そういう風に言ってくれるのはお前だけだよ……徹」

「まあな。とりあえずお帰り」

「ただいま。………どうしてここに？」

徹と会えたのはいい。けどなぜここであんなに会ったのかは謎だ。

「バイトしてるって風間さんに聞いてだな。で、ここに来たってわけ」

「そうか。ここに来た経緯はわかった。でも……親友のお前に約束も守れないバカって言われる筋合いはない」

いくら徹でも俺と有咲の話に入ってこられると困る。それに話を知ってること自体おかしいだろ。

「そうか？　だつて本当の事だろ？」

「これは俺の問題で、他人に意見を仰ぐようなことじゃない。自分で決めないといけな

いんだ」

「はっ。笑わせんなよ。自分で決められてないだろ。決めるどころか、全く学習出来ない」

徹の言葉が妙に心に突き刺さった。どう考えても久しぶりに会った友達にかけられる言葉ではない。つまり……徹は本気つてことだ。

「いつになつたら向き合うんだ？　いつまで自分の気持ちを押し付ける？　お前は変わる気持ちがあるのか？」

「そんな簡単な問題じゃないんだ。今でも有咲が俺の事を好きかなんてわからない。俺の気持ちだけであの2人の間に入るわけにはいかないんだ」

「なんだそれ……。結局、そうやって本人には確かめないのか？　お前の事を好きじゃない奴が本当に好きだったのか聞いてくると思うか？」

ん？　それってどういう……好きじゃない奴が、本当に好きだったのか聞いてくる？　有咲が……徹に？

徹が嘘を付いているようには思えないのが、余計に俺の頭を混乱させた。彼氏が居るのに俺が有咲のことを本当に好きだったのか聞く必要があるか？

「後は自分で確かめろよ」

「……………わかったよ。帰ってきてきて説教されるとはな」

「悪い悪い。今度はどっか行こうぜ」

「ああ」

本当に説教をしに來ただけらしい。手をひらひらと振って帰っていった。有咲の今の気持ちかはわからないけど、少なくとも前は俺のことを好きだったらしい。

このなんとも言えない感情が俺の中で渦巻いていた。

Last Episode 果たされた約束

久しぶりに徹に出会ってから一週間。今日は優衣、有咲と俺の3人で出かける予定だ。

季節は変わって春。3月から4月へと移り変わり、入学シーズン。後一週間程度で大学の入学式。

この一週間、バイトをこなしつつ、もともと交流のあった人達と過ごした。徹から説教された事は今でも鮮明に覚えてる。寝る前に考えるから若干寝不足だったり……。

あれから有咲とは会ってない。バイトや用事が忙しいって言ったら言い訳にしか聞こえないだろうけど、実際そうだ。このままじゃいけないのは自分でもわかってる。

俺と有咲の関係を知ってなのかはわからないが。優衣から有咲とオレの3人で出かけるかと言われた。

もちろん即OKをだした。機会があれば有咲の今の想いを聞きたい。あわよくば……。

「それはねえか」

街ゆく人を見ながらボソツと呟く。俺と有咲が付き合える可能性なんか万が一でも

ありえるのだろうか。前と同じ過ちを繰り返す俺なんかと……。

そういえばみんなすごいのは、自分達の苦労話を笑い話で話してたっけ。それを見て惨めに思えるのはここだけの話だ。苦労話を笑い話に変えられる程、俺はまだ大人じゃない。

「遅いな……」

時間を確認するとちょうど待ち合わせの時間。早く来たのは俺だけけど5分前に来るとか出来ないのか？ まあ優衣は遅れて来そうだよ。最近仕事忙しいみたいだからな。でも……有咲は来ても——

「あつ。やつと見つけた」

右の方から有咲の声が聞こえてきた。視線を向けるとなぜかジト目で俺のことを見ている。まるで俺が集合時間遅れたみたいな表情だ。

なにか悪いことでもつてしまったか？ ……したかも。

「やつと見つけたってどういう……」

「待ち合わせ場所ここの反対側だけど」

「え？ マジで……？」

「マジで」

スマホで待ち合わせ場所を確認するとどうやら本当らしい。勘違いするにも程があ

るな。どうかしてるぞ俺。

「悪い。勘違いしてた」

「しつかりしろよ……」

会話はそれで終わってしまった。……なんか気まずい。前の俺と有咲ってこんな感じで話してたっけ？ いつも喧嘩してたような気もしなくはないんだけど……。

「……喧嘩でもするか？」

「なんでだよ……」

ものすごい微妙な顔をされた。

まあだろうね。なんで俺も喧嘩する？ って聞いたのかは意味不明だ。話すことがないからって喧嘩するはないよな。もう少し考えて話そう。……考えて話す？ なんて考えて話す必要があるんだ？

普通に話すということがわからなくなっていた。

何も会話がないまま10分が経過した。いくら待っても優衣は姿を現さない。あいつが待ち合わせ時間をこんなき過ぎるとは……。なにもなければいいけど。

「なっ……え？ どうすんの？」

「どうかしたか？」

スマホを片手に有咲から焦りを感じた。この流れだと思いい当たることは1つしかないんだが……。

「ゆい、仕事入ってこれないって……」

「はあ？ 呼んだ張本人来られないってどういうことだよ……」

いろいろマズい状況だぞ。このまま行くと2人きりで映画観に行くことになるぞ。

……ヤバいじゃん。どうなるんだこれ。

話がないまま数分。こうしても仕方ないと思ったのか、有咲が口を開いた。

「どうする？ ふ、2人で映画でも観に行く？」

「彼氏持ちの奴と独り身の奴が一緒ってヤバくないか？」

「やっぱりそういう事思ってたんだ」

そっぽを向いて言う有咲をじっと見つめる。考えていたことをバレてた以前に引つかることがあった。

“やっぱり”という言葉だ。

もしかすると……いや。もしかなくても俺の考えはバレてたのかもしれない。もうそれならいつそのこと——

一歩前に踏み出せ。

散々逃げてきたんだ。今度は前に進むだけ。告白よりは……簡単だ！

「有咲。ちょうど良いし話さないか？」

「話？」

「……場所を変えよう。ここじゃ話づらい」

もう逃げ道はない。

2人きりで話せる場所は限られてる。公園は人が居るだろうし、カフェみたいなお店は他の人がたくさん居る。となると場所はかなり限られてしまう。あんまりよろしくはないだろうけど、場所は俺の家にした。

今は家に向かう……帰る途中って言った方が正しいか。なんとも奇妙な。1時間前

に家を出たはずなのに1時間後に帰る。何しに行つたんだっけ？

「恵……」

な、名前で呼ばれた……。

無言で歩いてしていると少し後ろを歩く有咲から名前と呼ばれたことに若干驚きつつ「ん？」と答えた。

「付き合ってる人が居るって知つた時どう思った？」

「どうって……前にも言つたろ？ 付き合う人なんて有咲の自由だつて。だからどうも思つてねえよ」

本音は本音だが、少しばかり嘘が混ざつてる。付き合ってる人が居るってわかつた時は信じられなかった。ずっと待つててくれると思つてたから。正直、居間有咲と付き合えてる奴がうらやましいよ。

「じゃあ私のことは嫌い？」

「嫌いではない。1人の友達として好きだ。今はそれ以上でも以下でもない」

後ろに振り返ることなく淡々と云つた。すると、聞こえていた足音が聞こえなくなり、立ち止まつて後ろに振り返る。有咲は俯いていた。

「有咲？」

「……………私は好き。恵のこと」

「お前なに言つて——」

俺の言葉を遮るように有咲は真つ直ぐな黄色の瞳を向けて言った。

「今でも、恵のことが好き」

その言葉に嘘、偽りは微塵も感じられなかった。一度も真つ正面から有咲の真剣な表情は見たことがない。どこか新鮮な気持ちと

俺は今、告白されてるのか？

というドキドキ感が心の中で渦巻いていた。

「彼氏が居るんだろ？ それなのになんで告白なんか」

「別れた……というより振られた。今の私は恵しか見えてないって言われて」

もうなにかなんだかわからない。有咲は振られて彼氏なしで、今は俺のことが好き？

言葉では理解出来るものの深いところまでは理解が追いつかない。

つまり俺が出さなければいけない答えはなんだ？ 告白に対しての返答か？ なん

で俺しか見えていないのか理由を聞くべきなのか？

一度にたくさんさんの情報に後頭部をかきながらとりあえず、告白の返答を返すことにした。

「さつきはああ言ったけど、俺も有咲のことは今でも好きだ。でも……本当に良かったのか？ あいつは俺以上に有咲のことを好きだと思っただけだ」

「あいつは最後まで私の全部は理解してくれなかった。でも、恵は違う」

さつき以上に真剣な眼差しで見つめてくる。それがあまりにも眩しかった俺には直視出来なかった。でも……それだけ有咲は俺のことを真剣に考えてくれてるんだ。ちゃんと答えよう。

「こんな俺で良ければ」

2年か……いや、4年もかかった。

「よろしくな」

4年越しに約束を果たせた。

「いや／＼やつとくつ付いたか」

「今ので78回目だからな。80回言ったら……な？」

「怖いこと言うなよ……」

花咲川大学の入学式の日。隣に座る恵が宇崎君に文句を言っていた。私が告白した日の帰りにひよっこり現れた優衣と宇崎君。全部あの2人が立てた作戦らしい。嬉しいような嬉しくないような……。あれから恵はずっと根に持つてるのか、その話題が出る度に回数を数えてる。よく覚えてられるな。

「で？ あれから何回デートしたの？」

「なんでお前にそんなこと言わないといけないんだよ」

「良いじゃん別に。オレとお前の仲だろ？ な？」

「知らん」

頑なに答えない恵の変わりに言う……よ、4回くらいかな。お互いやることあるし、頻繁には会えないけど。たまに会える日はすげー嬉しい。毎晩電話もするし、メール送ればバイト中以外はすぐに返答返ってくる。本当に付き合ってるってことを実感出来た。

「ったく……。なんで有咲は笑ってるんだ。今のやりとりに笑う要素あったか？」

「恵がムキになってたからつい」

「なんだそれ。しつこく聞いてくればそうなるだろ」

「確かに」

ゆいはある程度いじつたらやめるタイプだからそんなにイラつかなかったけど、宇崎君は違う。とことんいじつてくるタイプ。私もしつこいって思わないわけじゃない。

「じゃあ今度香澄達誘って焼肉でも奢らせね？」

「それ良いな。じゃあ俺と有咲が付き合った記念ということだ」

「す、すいませんでした……」

「よろしい」

7人で焼き肉屋に行つたらいったいいくらかかるんだろう……。おたえと香澄は意外と食べるから。んゝ3、4万くらい？

「おつ、入学生の挨拶が始まるぞ」

「これって入試で1番の人がやるんじゃないかなかったつけ？」

「たぶんな」

つてことは壇上に上がったあの男の人が1番だったんだ。見るからに頭良さそう。もう少し勉強すればよかったかも。

紙に書いてある文章を読み上げていく中、ふと2人のことを見た。宇崎君は寝てて、

寝るのはえな……。恵はどこか遠くを眺めていた。その視界にあの男の人が映ってるとは思えない程に。

恵の左手をそつと握った。

「ん？ どうした？」

「いや……。遠く眺めてたからつい」

「そつか。ありがとな」

微笑むような笑顔に思わず顔を逸らしてしまった。今のはズルい……。

「有咲？」

「なんでもない」

ちやうど挨拶が終わったのか、紙をしまいこんだ。挨拶して終わりそう思った矢先。頭を下げずに勝手に喋り始めた。

「勘違いしてほしくないのと言っておきます。ワタシが入試1位ではないのですの」

……………あいつなに言ってるの？

急な展開に会場中がざわざわし始めた。頭を下げた壇上を何事もなかったかのように階段を下っていく。ふと恵を見ると目をパチクリしてその男の人を見ていた。たぶん私と同じこと思ってるんだろうな……。

「あいつ頭大丈夫か？」

「勉強し過ぎたんじゃね？」

「なるほど」

こうして波乱の入学式が終わった。いよいよ明日から大学生活が始まる。春休みが最高過ぎて大学生活が始まるのが憂鬱だったけど……恵と一緒にだからむしろ早く始まらないかって思ってる。

手を繋いで歩く私の彼は親しい人に程、気持ち素直にぶつけられなくて。困ってる人を見つけるとほおっておけない。大好きな人。

「恵」

☆

なんだか新鮮だ。こうして有咲と手を繋いで歩けるのが夢みたいだ。4年前はこうなるだなんて思ってたし。俺があの有咲と。

右手から伝わる温もりを感じながら帰る道はいつもとは違った。通りなれてるはず

の有咲の家への道が今日は幸せでいっぱいだ。

こうして好きな人と一緒に帰れる幸せをこれからも守っていかうと思う。

「恵」

「なんだ？」

一人新たな誓いを立てていると有咲に名前を呼ばれ、視線を向ける。彼女は微笑みながら俺に告げた。

「だ、大好き……」

顔を真っ赤にしながら素直に自分の気持ちを告げてきた。昔の有咲だったら有り得ないだろう。けど、今の有咲は違う。俺が居なかつた間に変わった。もちろん良い意味でだ。

だから俺もそれに答えるように告げた。

「俺も大好きだ」

道のど真ん中で口づけを交わした。

過去が変われば未来も変わる。

あ
の
残
酷
な
未
来
に
向
か
つ
て
進
む
こ
と
は
も
う
な
い
だ
ら
う
。
俺
は
今
を
後
悔
し
な
い
よ
う
に
生
き
る
。

FAINAL EPISODE 思い出話

やあみんな、久しぶりだな。

入学式から日は経つて約2週間くらい経つ。大学生活にはだいぶ慣れてきた。毎日有咲と学校に通えるのは最高だよ。あとは帰る方向さえ逆じゃなければ……。遠回りして帰ると時間かかるからな。

ここ最近台風が二回も来たりして雨ばかりだよ。ホント嫌になるわ……。けど悪いことばかりじゃない。雨の日は有咲と同じ傘で帰る。つまり相合傘というやつだ。

でもなー。素直に言つてはくれないんだよ。そこが可愛いんだけど。

袖を少し摘まみながら上目使いで頼んでくれたら、俺じゃなくても撃沈だろ？ 思わずお持ち帰り——これ以上は有咲の視線と白鷺先輩の視線が痛いからやめよう。

「あの一、先輩が居ると出来ることも出来ないんですけど」

「あらあら、そう簡単にここでイチヤイチヤ出来ると思つてるのかしら？」

バチバチだよ……。女つて怖いな。つうか昼休みやることかこれ？

有咲と二人で外のテーブルで昼飯を食つてたら、なにくわぬ顔で白鷺先輩が乱入して

きた。ここ最近ずっとそうなんだよ。

「そろそろ喧嘩は終わりに〜」

「けいは黙ってて」

「神山君は少し黙ってくれると助かるんだけど」

へへへ…。ダメだこりや。俺なんかのために争わないでなんて言った暁には殺されそうな勢いだ。はあー。誰か止めてくんないかな。平和なお昼を取り戻したい。

大人しく有咲の手作り弁当を食べていると、ついに現れた救世主。その名は――

「二人ともまたですか？ 神山くんが迷惑しているでしょ」

「紗夜先輩。良いところに」

「別に周りが迷惑していると思っただけです」

「え?! 今神山くんが迷惑してるって言ったのに?!」

なぜかそっぽを向かれて知らん顔をされた。この人達よくわかんない。もう少し素直になってくれると助かるんだけどな……。そこが可愛い所なんだろうけどさ。

「あ! 見つけましたよ! アリサさん!」

「げっ…。鍋川じゃん……………」

そのゴキブリが出たみたい嫌な顔するなよ有咲。鍋川がかわいそうだろ? なんだかんだで良い奴なんだからさー。

「なんだお前も居るのか。モチベ下がるから消えてくんない？」

俺が視界に入った瞬間冷めた顔で言葉を浴びせてきた。

「前言撤回。さっさと死ね、アホ川」

「ボクはしにましえーん」

「うぎ。お前がここに来るなんて二万年はえーんだよ」

「お昼はどここのウルト○マンだ！」

結局俺とアホ川も喧嘩が始まる。呆れたのか紗夜先輩はいつの間にかテーブルの上に弁当を広げて食べていた。止める気なんて微塵もないんですかあなたは。

この状況はいったい誰が収集を付けるのか。それはだな。

「楽しいことになつてゐるわね♪」

「あ……出た」

常に楽しいことを探している金持ちのお嬢様。弦巻ころもである。この子が来ると本格的に収集が着かなくなるんだよ。だからぴたりと止まる。

「いや〜お昼は楽しいな〜」

「ホントホント。有咲の手作り弁当めっちゃ美味しいよ」

「ば、バカ！ 大声で言うなよ！」

「仲良いのね♪」

「どうやらごまかせたようだ。危ない危ない。弦巻さんには悪いけど……な？　巻き込まれると少々厄介なもの事実だ。」

「こうして俺の日常は過ぎてゆく。でも、見てわかる通りに周りに可愛い女子がたくさん居るせいか男子にはあまり良い目では見られない。おまけに彼女持ちとなれば反感を買うよな……………」

「第一考えたら、周りに居る女子はみんな可愛い。白鷺先輩なんて女優だぞ。今や女子だけでなく、男子からも人気がある Rose lia のギターの紗夜先輩。」

「そりゃ嫌われるわな……………」

「俺の大学生活はこうして流れていくのであった。」

「全部の講義が終わり有咲と一緒に帰る為に校舎内を探していた。」

「あれ？　いったいどこ行った？」

「この年になって迷子とはいったいどうなっているんだ全く。けしからん彼女だ。浮気とかしてんじゃ——」

「好きです！　付き合ってください！」

「曲がり角の近くで聞こえてきた言葉は俺の足を止めるのに十分だった。」

「あれえ？　もしかして誰かに告白してるのかな？　それじゃあ俺はお邪魔虫ですね。」

さっさとこの場から離れますか。

「ごめんなさい！」

振られたー!? まさに告白した瞬間秒で切り捨てられたー! しかも聞いたことがある声だなおい。

あんまりひとが寄り付かない場所でなんと俺の彼女に告白をしていた。知らない男が。

とぼとぼと俺の脇を通って男は帰っていった。そーっと曲がり角を覗くとため息を吐いている有咲の姿。知らん振りして帰ろうかな。

一旦この場から離れようとした時にふと有咲と目があってしまった。とっさに隠れずに前に出て、見ていない態度をとる。

「こんな所に居たのか」

「聞いてた？」

俺の気遣いを無視するどころかそれを投げつけてきた。

「なにが？」

「私が告白OKしたこと」

「いや、してないだろ・・・あ」

トラップに引っかかった。人の嘘を見抜くのにどんな方法使ってるんだよ。スト

レート投げるって言ったのにカーブ投げられた気分だ。

「見てたなら見てたって言えればいいのに」

「なんかな…」

言葉で表すのは難しかった。なんで断つたの？ って聞くわけにはいかないし、結構告白されんの？ とかも聞くのはちよつとな……。俺の中にもやもやする感情があるのは確かだ。

「最近多くて、マジでめんどくせえ」

「そう言うなって。相手は真剣なんだぞ？」

「じゃあ付き合ってるいいの？」

「ダメに決まってるだろ」

俺が真剣な顔で言う和有咲は手を口に当てて微笑んだ。ここ最近有咲の仕草が女の子ぽくなってきたような気がする。別にバカにしているわけじゃない。その1つ1つの仕草が可愛いって言うか……………。

「疲れたし帰ろ」

「そうだな」

有咲と共に帰路についた。

手を繋いで帰るいつもの帰り道。今日はいつもよりは会話が少なかった。ここ最近俺から話題を振ることが減ってきてるから、なにか話題を作らないと。

だけど人間やろうと思えば思う程出来なくなる。全く話題が思いつかない。こうなったら最近話題の親父の映画の話でも！ いや待て。なんか嫌だな。

嫌というより白鷺先輩の話を出すと有咲の機嫌が悪くなるんだよ。どうしてだろうか。

「ねえ。恵はどこで白鷺先輩と仲良くなったの？」

あなたはエスパールですか？　なんでこのタイミング？

「えつと……親父繋がり」

「本当？」

そこは間違っていないんだけど……な？　今話すと別れる原因にもなりかねないことになってしまいうから話せないんだよ。詳しくは響かない声を参照。

「ホントホント。映画の撮影と旅行を同時にするってアホなことをするために京都に来た時だ」

「へえー。それで仲良いんだ」

「まあな」

余計なことは省いて説明したはずなのに有咲の機嫌はどこか悪かった。白鷺先輩どころか女の人と話していると、どこか機嫌が

悪いような気がする。もしかするとこれは……。

「もしかして…妬いてるのか?」

「はあ?! べ、別に妬いてねえし」

「嘘つくなんて。嘘つくといつも目を逸らすからバレバレなんだぞ?」

「うっ……」

俺が誰かに取られるか思ってるのか? 意外と有咲は嫉妬深いのかもな。そこが

また可愛い。

「大丈夫。浮気しないから」

「したら地獄に送る」

「それは勘弁してくれ」

俺の手を握る有咲の力が少しだけ強くなったのを感じた。

有咲…嘘はつきたくないけど、白鷺先輩とのことはやっぱり話せないや。

有咲の家に帰った俺と有咲は縁側で、2人並んで手を繋ぎながら外の景色を眺めていた。空は真つ赤な夕焼け空。この空を見ていると思ひ出すなく。久しぶりに会ったことを。

「そういえば、久しぶりに会ったのも夕方じゃなかったっけ？」

「俺も同じこと考えてた。夕方で合ってるぞ」

あの時は無視される理由がわからなくて悪態ついたっけ。買うもの間違ってお母さんに怒られたし、災難ちや災難だ。

「あの出会いがなかったら私達仲直りしてなかったのかな」

「その可能性はあるかも。どっちにしろ、お使いがなかったら会わなかった」

お使いだけが全てじゃないぞ？ やっぱり一番大きいのは戸山香澄という存在だ。香澄が居なかったら俺達は仲直りどころかあのまま通り過ぎて居たかもしれない。

それだけじゃない。ポピパのメンバーとも会えなかった。

「でもやっぱりかすみだよな」

「あいつが居なかったら俺達は変わらなかった。香澄には感謝してもしきれないな」

「うん」

有咲はそつと俺に寄り添ってくると肩に頭を乗せてきた。こんなに間近な距離なの

に不思議とドキドキしなかった。当たり前前になったからとかじゃない。言葉では言い表せないけど、これだけは伝えられる。

いい匂いがする。

ふざけてるわけじゃないんですごめんさい。本当のことだからつい。

「ゆいから話を聞いた時…胸が締め付けられた。恵にずっと辛い思いさせてたって考えたらなおさら………」

「気にするなつて。あれは有咲が軽蔑したわけでも陥れた優衣が悪いわけでもない。誰も悪くないんだ。このまま誰かのせいにし続けたら負の連鎖が続くだけ。憎しみは憎しみしか産まない」

自然と有咲の手を握る力が少し強くなった。

「言い訳にしか聞こえないかもしれないけど………こうでもしないと負の連鎖は止まらない。」

「恵つてたまに良いこと言うけど、どこで勉強してるの?」

「たまにつて………俺だつてそれくらいは言えるぞ?」

「別にカッコいいこと言わなくたって恵はカッコいいよ」

「え?」

俺がカッコいい?

カツコいいなんて言われて嬉しくない男子は居るのだろうか。いや居ない。

「聞こえなかったからもう一回」

「はあ?! そんな恥ずかしいこと何回も言えるかよ!」

「えー。減るもんじやないし良いだろ?」

「やだ」

結局何度お願いしても言ってくれなかった。まあ仕方ないか。今度は真つ正面から言ってもらえるように頑張るよ。

俺の物語はここまでだ。また会う日まで。みんな元気だな。



ここは…どこだ?

目を開けると、こつちに向かつて歩いてくる黒髪の男の姿が映る。

彼はそつと右手を軽く挙げくる。オレは自然と手を挙げて彼から何かを受け継ぐようにハイタッチを交わした。

「次はあんたの物語だ。いちがやあきと市ヶ谷彰兔」

その言葉だけが頭に響いた。

ハッと目を覚まし上半身だけ起こした。息は少し荒く、肩を上下している。壁にかけてある時計に視線を向けると、長針は11に。秒針は6を指していた。

「6時前か…」

ベッドから降りてカーテンを開ける。まだ登りきらない太陽の光が部屋に差し込む。窓に写る自分の顔。金髪の髪が生える頭を掻いて眩いた。

「オレの物語ってなんだ？」

夢でお前の物語だって……なんのことだ？

明日から学校が始まるって時に変な夢を見た。